

おお いわ た かみ むら
大 岩 田 上 村 遺 跡

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第77
「大岩田上村遺跡」正 説 教

ページ数	四	調	正
番号			
p54	宮崎市大岩田町…	都城市大岩田町…	
12行目			

おお いわ た かみ むら
大 岩 田 上 村 遺 跡

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区全景（南から）

序

宮崎県教育委員会では、農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴い大岩田上村遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

今回の調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を検出しました。中でも、都城市では初めて検出された旧石器時代の細石刃石器群や、中世の道路状遺構は注目されます。先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言いただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より謝意を表します。

平成15年9月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 米良 弘康

例　　言

- 1 本書は、農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した大岩田上村遺跡の発掘調査報告書である。調査は緑資源公團九州文社都城建設事業所の委託を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 発掘調査は、平成11年11月17日から平成12年10月25日の2か年にわたって実施した。整理作業および報告書作成は平成13年度から平成15年度の3か年で行った。
- 3 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1「都城」を、遺跡の周辺地形図等については都城市都市計画図の1万分の1図を基に作成した。
- 4 現地における実測図の作成は主として、南正覚雅上、堀田孝博、松木　茂が担当し、福田泰典、加藤　学、藤木　聰、日高敬子、高木祐志、松尾有年、金丸史絵、丹　俊詞、工藤基志が補助した。
- 5 空中写真撮影は、(有)ふじた航空写真および(有)スカイサーべイ九州に、自然科学分析は、(株)古環境研究所に委託した。
- 6 遺物・図面の整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは、南正覚、堀田、松木と整理作業員が行った。また、錢貨の応急処置は日高(敬)、古屋美樹、小宇都あづさ、黒木　修が行った。
- 7 本書の執筆・編集は南正覚が担当したが、第Ⅰ章第1節は谷口武範、「第Ⅱ章第3節2. 遺構と遺物(3) 道路状遺構」については『大岩田上村遺跡 第Ⅱ章第1節 A区の調査(堀田執筆)』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集2001)を、「第Ⅱ章第6節 道路敷設部分の調査」については『大岩田上村遺跡 第Ⅱ章第3節C区の調査(松木執筆)』(同上)にそれぞれ加筆している。また、「第Ⅳ章まとめ 道路敷設部分の調査」についても『大岩田上村遺跡 第Ⅲ章まとめA区(松木執筆)』(同上)を転載している。なお、使用した遺構・遺物等の写真は南正覚、堀田、松木が撮影した。
- 8 土層及び土器の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修)に掲げた。
- 9 本書で使用した方位は、座標北(座標第Ⅱ系)である。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

竪穴住居跡・・・SA	攝立柱建物跡・・・SB	土坑・・・・・・SC	
※A区で確認された馬埋葬土坑もSCを使用している			
溝状遺構・・・・SE	道路状遺構・・・SF	ピット・・・・SH	土壤墓・・・・SX
- 11 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。
- 12 ウマの遺体の調査については鹿児島大学農学部獣医学科 西中川　駿・久林朋憲両氏より玉稿を賜った。
- 13 次の方々に調査及び報告書の作成にあたり指導・助言をいただいた。記して謝意を表したい。
来畠光博、横山哲英、米澤英明、下田代清海(敬称略)

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	(谷口)	1
第2節 調査の組織	(南正覚)	1
第3章 遺跡の位置と環境	(〃)	3

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査の経過	(南正覚)	8
第2節 基本層序	(〃)	9
第3節 A区の調査		
1. 調査の概要	(〃)	10
2. 造構と遺物	(南正覚・塙田)	10
第4節 B区の調査		
1. 調査の概要	(南正覚)	28
2. 造構と遺物	(〃)	28
第5節 C区の調査		
1. 調査の概要	(〃)	30
2. 造構と遺物	(〃)	30
第6節 道路敷設部分の調査	(南正覚・松本)	37

第Ⅲ章 自然科学分析の結果

第1節 土層とテフラ	45
第2節 植物珪酸体分析	49
第3節 大岩田上村遺跡出土のウマの遺体	54

第Ⅳ章 まとめ	(南正覚・松本)	56
---------------	----------	----

報告書抄録	67
-------------	----

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 大岩田上村遺跡グリッド配置図・調査区位置図	5-6
第3図 大岩田上村遺跡周辺地形図及び調査区	7
第4図 基本層序	9
A区	
第5図 A区遺構分布図	11
第6図 土層断面図	11
第7図 1・2号竪穴住居跡実測図	12
第8図 中・近世遺構分布図・土層断面図	14
第9図 1号道路状遺構実測図(1)	16
第10図 1号道路状遺構実測図(2)	17
第11図 1号道路状遺構実測図(部分)・土層断面図	18
第12図 1号土坑墓出土遺物実測図	19
第13図 1・2号土坑墓実測図	20
第14図 1・2号土坑墓出土銅貨拓影	22
第15図 横列ビット配置図	23
第16図 A区出土遺物実測図(1)	25
第17図 A区出土遺物実測図(2)	26
第18図 A区出土遺物実測図(3)	27
B区	
第19図 B区遺構分布図	29
第20図 1号土坑実測図	29
第21図 B区出土遺物実測図	29
C区	
第22図 C区遺構分布図	31
第23図 1号竪穴住居跡実測図	32
第24図 1号掘立柱建物跡実測図	32
第25図 1号溝状遺構実測図	33
第26図 1~4号土坑実測図	33
第27図 C区出土遺物実測図(1)	35
第28図 C区出土遺物実測図(2)	36
第29図 A・C区トレンチ位置図	38
第30図 1~6号トレンチ土層断面図	39
第31図 2・3号トレンチ出土の石器	41
第32図 3~5号トレンチ出土の石器	42
第33図 2号トレンチ遺物出土状況	42
第34図 3号トレンチ遺物出土状況	42
第35図 4号トレンチ遺物出土状況	43
第36図 5号トレンチ遺物出土状況	43
第37図 6号トレンチ遺物出土状況	43
第38図 参考遺物実測図	44

表 目 次

第1表 溝状遺構一覧	13
第2表 1・2号土坑墓出土銅貨一覧	21
第3表 出土遺物観察表(1)	59
第4表 出土遺物観察表(2)	60
第5表 出上遺物観察表(3)	61
第6表 出土遺物観察表(参考資料)	62

図 版 目 次

図版9 A区中・近世遺構(南から)	
図版1 A区1号道路状遺構実測状況	17
図版2 A区1号土坑墓検出状況	20
図版3 A区2号土坑墓実測状況	20
図版4 C区1号竪穴住居跡実測状況	32
図版5 C区1号掘立柱建物跡実測状況	32
図版6 細石刃と細石刃核	43
図版7 A区出土土器	63
図版8 A区出土土器	64
B区出土土器	
C区出土土器	
A区1号土坑墓出土土器	
参考資料	
図版9 A区中・近世遺構(西から)	
A区溝(S E 0 2)実測状況	65
A区土層断面	
A区1号竪穴住居跡実測状況	
B区ビット検出状況	
A区ウマ埋葬土坑	
A区2号竪穴住居跡実測状況	
B区1号土坑遺物出土状況	
C区3号トレンチ遺物出土状況	
図版10 A区中・近世遺構(南)実測状況	66
A区号道路状遺構上層断面	
・ 硬化面A検出状況	
・ ビット検出状況	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

緑資源公団(旧農用地整備公団)において、農用地整備事業として農業生産性の向上・農業経営の安定を図る圃場整備事業(204ha)やそれに伴う農産物流通の迅速化を目指した広域農道(総延長19.1km)建設が計画された。事業区内には多くの遺跡が分布しているため、県文化課では、発掘調査期間や面積の標準化及び調査員の確保などの課題について公団と継続して協議を行ってきている。

「今町団地」圃場整備事業区は、南北に長く地形上、大岩田上村遺跡、宮尾・立野遺跡、諫訪免遺跡の三つの遺跡が分布しており、平成7年11月から平成8年1月にかけての試掘調査によって、それぞれの遺跡の状況が確認された。さらに、事業の具体化に伴い事業地区の拡大が計画され、再度、平成11年9月に遺跡範囲の絞り込みを目的とした確認調査によって弥生時代後期の住居址等が検出された。

この結果をもとに県文化課は緑資源公団九州支社都城建設事業所と事前の協議を行い、工事の切り盛り関係でどうしても遺跡の影響が避けられない大岩田上村遺跡を調査対象とし、平成11年度に10,000m²平成12年に15,000m²の調査を実施することにした。

第2節 調査の組織

大岩田上村遺跡の発掘調査は下記の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

平成11年度〈発掘調査〉

所長	田中 守
副所長	江口京子
庶務係長	児玉和昭
調査第二係長	青山尚友
主査(調査担当)	南正覚雅士
調査員(〃)	松本 茂

平成12年度〈発掘調査〉

所長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊地茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課総務係長	亀井維子
調査第二課調査第四係長	永友良典
主査(調査担当)	南正覚雅七
調査員(〃)	堀田孝博

平成13年度〈整理作業〉

所長
副所長兼総務課長
副所長兼調査第二課長
総務係長
調査第二課調査第四係長
主査(報告書担当)

矢野剛
菊地茂仁
岩永哲夫
龟井維子
永友良典
南正覚雅士

平成14年度〈整理作業・報告書作成〉

所長
副所長兼総務課長
副所長兼調査第二課長
総務係長
調査第二課調査第四係長
主査(報告書担当)

米良弘康
大蘭和博
岩永哲夫
野邊文博
永友良典
南正覚雅士

平成15年度〈報告書作成〉

所長
副所長兼総務課長
副所長兼調査第二課長
主幹兼総務係長
調査第二課調査第四係長
主査(報告書担当)

米良弘康
大蘭和博
岩永哲夫
石川恵史
近藤協
南正覚雅士

第3節 遺跡の位置と環境

大岩田上村遺跡(第1図-1)は宮崎県都城市大岩田町6809番地他に所在する。

都城市は、宮崎県の南西部にあり、東側を鰐塚山系、西側を霧島山系に囲まれた南北に細長い盆地の中央を占め、行政区画は宮崎県の西南部、鹿児島県との県境に接している。当遺跡は、市域南部の大岩田町に所在し、大淀川とその支流の梅北川とによって東西を挟まれた標高150~170mの平坦な成層シラス(二次シラス)台地上に立地し、川面との比高は約15mである。当該地の現況は畑地であり、南から北へ階段状につくられている。

周辺の遺跡を眺めると、本遺跡の西250mでは、1962年(昭和37年)の道路拡張工事の際、後に「五十式土器」と呼称される全縄文施文の完形土器が採取されている(第1図-2)。また、同台地上の北東端には大岩田村ノ前遺跡⁽¹⁾(第1図-3)が位置し、縄文時代後期~弥生時代後期の竪穴状造構や基底部(硬化面)にピットを伴う中世の道路状造構が確認されている。さらに、弥生時代前期~晩期の土器群も出土している。

一方、梅北川を挟んだ対岸の台地には、黒土遺跡⁽²⁾(第1図-4)と横尾原遺跡(第1図-5)が位置する。黒土遺跡では縄文時代後期~晩期の土器・石器、弥生時代前中期の竪穴住居跡、中世の溝状造構や道路状造構が確認されている。中でも、擦切石包丁や磨製穿孔具の出土は注目される。横尾原遺跡では、縄文時代後期~晩期の土器・石器や奈良時代の骨蔵器2点が出土したほか、縄文時代晩期前半の竪穴住居跡が検出されている。また、大淀川を挟んだ対岸の舌状台地には油田遺跡⁽³⁾(第1図-6)が位置する。縄文時代晩期と古墳時代中期頃の土器が多量に出土している。さらに、中世末頃の土塙墓が47基確認されている。

南西には、猪尾遺跡⁽⁴⁾(第1図-7)と坂ノ下遺跡⁽⁵⁾(第1図-8)が位置する。猪尾遺跡では、中世の畠跡と水田跡が検出されている。坂ノ下遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている。南には、梅北佐土原遺跡⁽⁶⁾(第1図-9)と嫁坂遺跡⁽⁷⁾(第1図-10)、金御岳北側山裾部には王子原遺跡⁽⁸⁾(第1図-11)が位置する。梅北佐土原遺跡では、縄文時代の集石造構が確認されている。嫁坂遺跡では、中世の水田跡、道路状造構、溝状造構が検出されている。王子原遺跡では縄文時代の竪穴住居跡や中世の道路状造構が確認されている。

<参考・引用文献>

- (1)都城市教育委員会『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』
- (2)都城市教育委員会『黒土遺跡発掘調査報告書』
- (3)都城市教育委員会『油田遺跡発掘調査報告書』
- (4)宮崎県埋蔵文化財センター『猪尾・坂ノ下遺跡発掘調査報告書』
- (5)宮崎県埋蔵文化財センター『梅北佐土原・中尾・翼原遺跡発掘調査報告書』
- (6)宮崎県埋蔵文化財センター『母智谷丘・畠田・嫁坂遺跡発掘調査報告書』
- (7)宮崎県埋蔵文化財センター『王子原遺跡発掘調査報告書』
- 都城市文化財調査報告書第14集 1991
- 都城市文化財調査報告書第28集 1994
- 都城市文化財調査報告書第25集 1993
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集 2002
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集 2001
- 宮崎県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告書第63集 2002
- 宮崎県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告書第45集 2001



1. 大岩田村遺跡

2. 五十市式上器採取地点

3. 大岩田村ノ前遺跡

4. 馬上遺跡

5. 横尾原遺跡

6. 油田遺跡

7. 鷺尾遺跡

8. 玻璃下遺跡

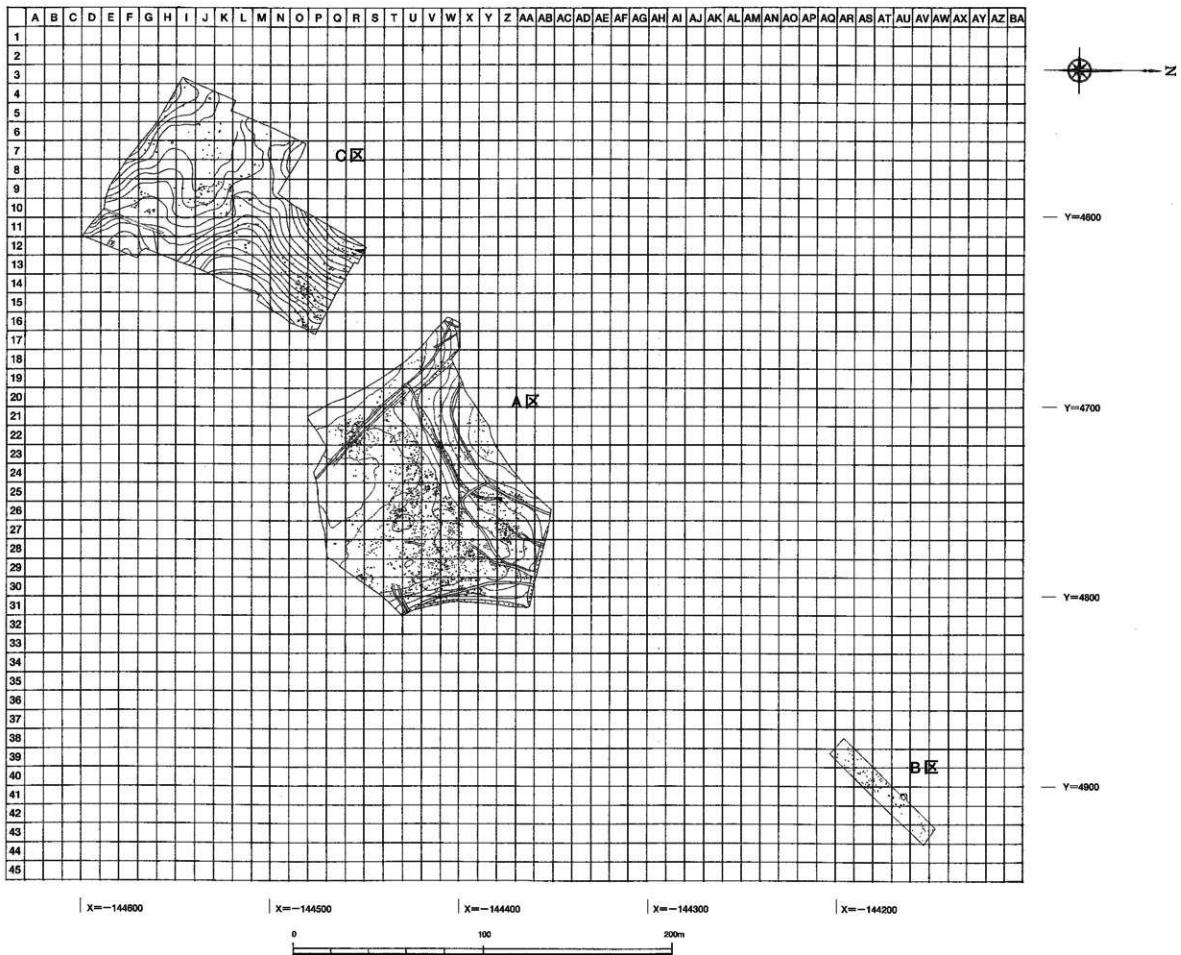
9. 梅北佐土原遺跡

10. 緑坂遺跡

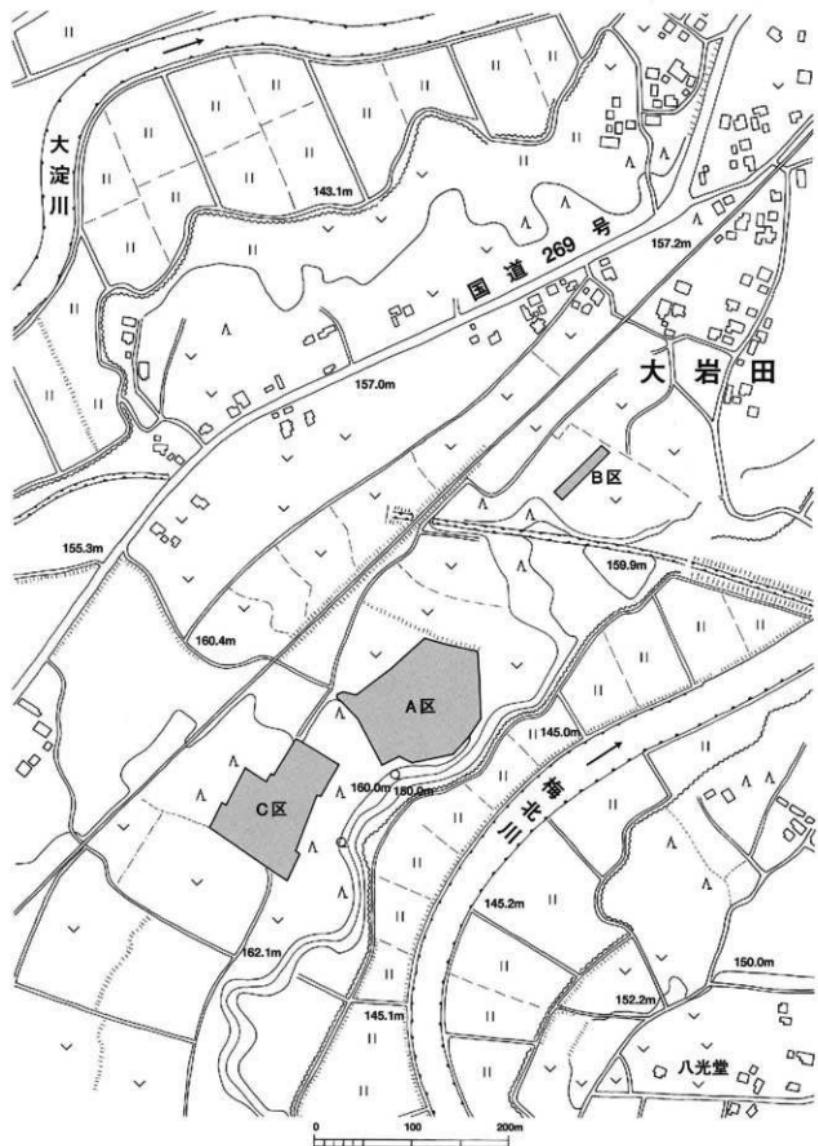
11. 王子原遺跡

12. 今河一里塚

第1図 遺跡位置図(1/50,000)



第2図 大岩田上村遺跡グリッド配置図・調査区位置図 (S=1/2,000)



第3図 大岩田上村遺跡周辺地形図及び調査区 (S=1/5,000)

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査の経過

大岩田上村遺跡の調査対象面積は25,000m²ある。

「今町団地」圃場整備事業に伴って平成11年11月17日より調査を開始した。まず試掘(3m×3mを150ヶ所設置する。)より調査区全体の遺構及び遺物包含層の確認を行った。その結果、遺構・遺物が確認できなかった3,000m²を調査対象面積から削除し、残り22,000m²について調査を実施した。調査範囲は谷等の地形により便宜上A～C区(A区は、試掘トレンチを入れた結果、中世遺構の残存する可能性が高いと推測された調査区西部をA区・I、残りの部分をA区・IIに区分)に分割し、各調査区の位置関係を把握し測量実測の基準とするため、国土座標に合わせた10mグリッドを設定した。該地は長年畠地として利用されていたため、耕作に擾乱が広範囲に、しかも御池軽石層まで達していた。

本調査はA区・Iから開始した。第I層を重機で除去した後、第II層から手振りによって掘り下げを行い、第III層上面で遺構確認を行った。ここで検出したのは中世～近世の溝状遺構及び中世の土壙墓である。その後、第V b層までを人力による掘削を行い、遺構検出を行ったところ縄文時代から弥生時代のピット群を検出した。

A区・IIについては、試掘トレンチを入れた結果、第II・III層では遺物が確認できなかったため第V a層上面までを重機によって除去した。その後、第V a層から人力による掘り下げを行い、第V b層上面で遺構確認を行った。その結果、縄文時代晩期の豎穴住居跡、中世～近世の溝状遺構、道路状遺構等を検出した。さらに、道路敷設部分の調査区北西隅に1箇所の確認トレンチを設定し、シラス上面まで掘り下げを行った。その結果、石鎚1点が出土したのみで遺構が確認できなかったため、平成12年8月10日でA区の調査を終了した。

平成12年1月7日からA区と併行して、新たにB区の調査を行った。調査では第IV層までを重機で除去した後、第V b層上面までを人力で掘り下げ遺構の確認を行った。その結果、上坑及びピット群が確認された。その後、第VI層の御池軽石層上面まで掘り下げたが、遺構が確認できなかったため平成12年2月7日を以て調査を終了した。

平成12年6月27日からA区と併行して、C区の調査を開始した。調査は第III層までを重機で除去した後、第IV層から人力による掘削を行ったが、調査区の北東部分には径40～80cm代の樹根が70数個残っており、抜根作業に予想以上の時間を費やしたが、抜根による周辺への影響を最小限に抑えて作業を終了することができた。その後、第V b層上面で精査を行い、豎穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑等を検出した。さらに、C区では道路敷設部分に4箇所、調査区の南隅に1箇所の確認トレンチを設定しシラス上面まで掘り下げも行った。その結果、縄文時代早期前半の土器片1点、さらに下層では都城市で初めて旧石器時代後期末の石鎚、細石刃核、細石刃、剥片が確認された。平成12年10月25日を以て全ての調査を完了した。

各遺構、各地点で出土した遺物は、1500点余りで、時代的には概ね縄文時代後期～弥生時代を中心に中世・近世の遺物も僅かながら出土している。

第2節 基本層序

本遺跡の層序は、基本的に各地点ごとに同じ様相を呈している。これを17層に大別し、さらに21に細分した。なお、テフラについては『第Ⅲ章 第1節 土層とテフラ』を参照いただきたい。

層序	色調	特徴
第Ⅰ層	表土	
第Ⅱ層	表土	
第Ⅲ層	灰白色土	文例: 鮎川層 (P3,S2,Bm) / 11層堆積は部分的に著る3-15cmで存在
第Ⅳa層	黒色土10YR1.8S/1 b c	文例: 鉱石を含む (およそ2%程度) しまりやや強く、粘性やや高い。 黒色土10YR2/1 黒色土10YR2/1
第Ⅴa層	黒色土10YR2/1 b	文例: 鉱石を含む5%程度含む しまりは第Ⅳc層と同程度 黒色内10YR2/1.5
第Ⅵ層	黄褐色土10YR6/8	鉱石を含む (およそ5%程度) しまりは第Ⅳc層と同程度 直徑1-10mmの黄褐色粒子のみで構成 しまりややあり、粘性なし
第Ⅶa層	黒色土10YR1.7/1 b c	鉱石を含む (およそ10%程度) しまりややあり、粘性なし 黒色土10YR1.7/1 黒色土10YR2/3
第Ⅷ層	明褐色土7.5YR5/8	アカホヤ火成灰層 (K-h) 繼めて大量にガラス質明褐色粒子より構成、全面にわたり黒色土が点的に混在する しまりややあり、粘性なし
第Ⅸ層	明褐色土7.5YR5/8	アカホヤ火成灰層 (Se-Ym) 混入層 直徑1-5mmの明褐色粒子が斜に埋入する しまり非常に強く粘性ややあり
第Ⅹa層	黒色土10YR1.7/1 b	黒色土上 (10YR2/3) が40%程度剥落し塊状を呈する 直徑1-10mmの黄褐色粒子・直徑1mm以下の白色粒子を多量に含む しまり強く粘性なし 黒色土上10YR1.7/1
第Ⅺa層	黑褐色土10YR2/2 b	P11火山灰 (Se-Ym) 混入層 直徑1-10mmの黄褐色・白色粒子を多量に含む しまりやや強く、粘性なし 黒褐色土上10YR2/3
第Ⅻ層	暗褐色土10YR3/4	黒褐色土灰 (P14,Se-S) 混入層 直徑1-10mmの黄褐色・白色粒子を微量、直徑5-10mmの黄褐色粒子・少量直徑1mm以下の黄褐色・白色・赤褐色粒子を多量に含む しまり強く粘性なし
第Ⅼ層	褐色土7.5YR4/4	上手に火成灰として直徑10-30mmの明褐色土ブロック (10YR3.4) が少量混入、直徑1-3mmの黄褐色・白色粒子を微量、直徑5-10mmの黄褐色粒子・1色粒子を多量に含む しまり非常に強く粘性なし
第Ⅽ層	暗褐色土7.5YR3/4	直徑5-10mmの黄褐色粒子を微量、直徑1-3mmの黄褐色・白色粒子を少量含む しまり強く粘性なし
第Ⅾ層	褐色土7.5YR4/4	直徑1-3mmの黄褐色・白色粒子を少量含む しまり、粘性やや強い
第Ⅿa層	暗褐色土・黑褐色土 (10YR2/2) が混じり塊状を呈する 直徑1-3mmの黄褐色粒子を多く塊状に含む しまり、粘性やや強い。 b	暗褐色土・黑褐色土 (10YR2/2) が混じり塊状を呈する 直徑1-3mmの黄褐色粒子を多く塊状に含む しまり、粘性やや強い P17 (Se-Tk6) 混入層 第Ⅹa層と主客が入れ替わり塊状を呈する ややややあり、粘性やや強い 直徑1mm以下に多くの微細な赤褐色粒子 (P17) を少量含む
第ⅰ層	黄褐色土10YR5/8	二次堆积シラヌス 所によく暗褐色 (10YR3/6) / 明褐色 (5YR5/6) 黄褐色土 (10YR4/2) を呈するなど色調の変化が激しい 一様粒上化している 直徑5-100mmの黄褐色・明褐色粒子のブロックを多量に含む ややややあり粘性なし

第4図 基本層序

<注>

各テフラの名称は下記の文献による。

小林智夫・江崎真由美「板島火山の噴火史」『名古屋大学加速器質量分析計測定報告書』(Ⅳ) 名古屋大学年代測定資料研究センター 1996

平田 勲「火山灰と土壌の形成」『宮崎県史』通史編原稿・古代1 宮崎県 1997

第3節 A区の調査

1. 調査の概要

A区は面積12,000m²、標高156.5~160mの北向き斜面をもつ低位丘陵地で、南側は急崖になっている。調査の結果、縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての竪穴住居跡(2軒)、縄文・弥生時代の両期にわたると推定されるピット群、中世の土壙墓(2基)、中世から近世の溝状遺構及び道路状遺構(37条)、時期不明の柵列(1基)と考えられる遺構を検出した。さらに、南東隅では近世の馬埋葬土坑(1基)も確認されている(第5図)。遺物は約1300点(12.2kg)が出土している。内訳は縄文土器片約1000点(10.5kg)、弥生土器片約200点(2.8kg)他である。なお、馬埋葬土坑については『第IV章 大岩田上村遺跡出土のウマの遺体』を参照いただきたい。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。

2. 遺構と遺物

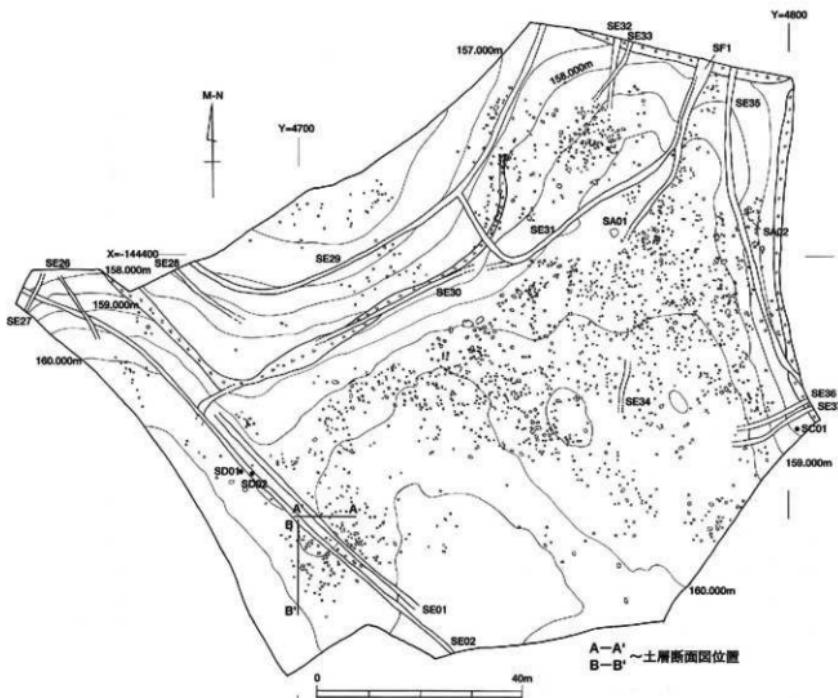
(1) 竪穴住居跡(SA)

1号竪穴住居跡(S A 1 : 第7図)

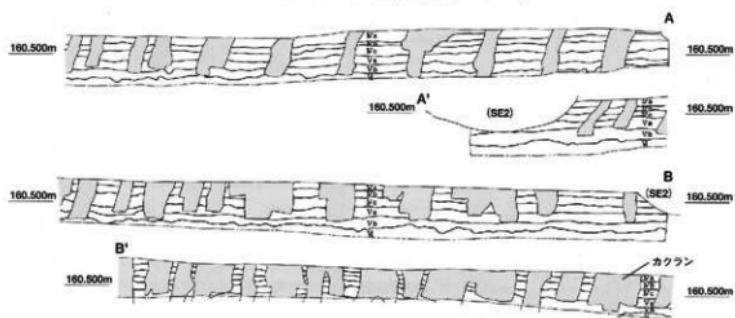
調査区の北東X-27・28グリッドで検出された。検出面は第V b層上面である。規模は長軸3.16m、短軸2.40m、床面積6.4m²の住居跡である。主軸方向はN-23°-Wを指す。検出面からの深さは4~16cmを測り、平面プランは楕円形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、長軸方向が西側に、短軸方向も南側に僅かに傾斜する。埋土はほぼ單一層で極細粒~細礫相当の御池輕石を30%含むしまりのある粘質の黒色土である。遺構に伴う柱穴は確認できなかったが、6基のピットが確認されている。形態は円形および楕円形で、径が20~40cm、深さ20~30cmを測る。遺物は住居内の南東側で、土器片が2点、炭化物が数点がほぼ床面で確認されているが、土器片2点については小片でありしかも器種不明のため図化はしていない。出土している土器から縄文時代後期後葉から晩期前葉かけての住居跡ではないかと考えている。なお、同遺構出土の炭化物を加速器質量分析(AMS)法による自然科学分析(放射性炭素年代測定)に委託した結果、補正年代値で2170±60年BPという年代が報告されている(¹⁴C年代は2220±60年BP)。

2号竪穴住居跡(S A 2 : 第7図)

1号竪穴住居跡から東へ23m、東向きの斜面の際のX-30グリッドにおいて検出した。東側が削平されているため住居の一部を失っている。検出面は第V b層上面である。主軸方向はN-8°-Wを指し、推定で長軸約2.7m、短軸約2.0m、床面積約5.2m²の住居跡である。検出面からの深さは4~12cmで隅丸方形プランの住居跡と想定される。床面は東から西へ3°、南から北へも3°傾斜している。埋土は3層である。遺構に伴う柱穴は確認できなかったが、床面で主軸方向を同じくする不整楕円形の掘込みを確認している。掘込部の床面からの深さは5cmを測る。住居内および不整楕円形の掘り込みからは遺物等は出土していないが、1号住居跡と同様に縄文時代後期後葉から晩期前葉かけての住居跡ではないかと考えている。



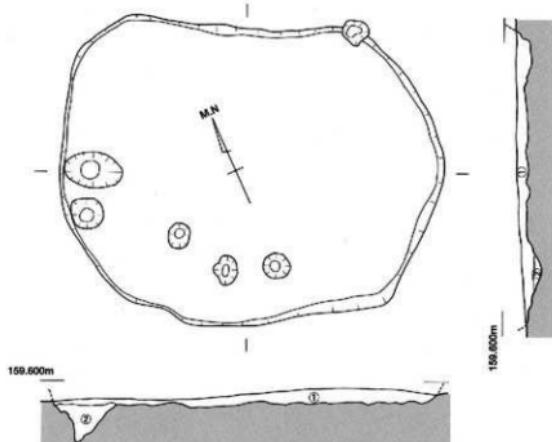
第5図 A区造構分布図 (S=1/960)



*層序については、第Ⅱ章第2節基本層序を参照いただきたい。

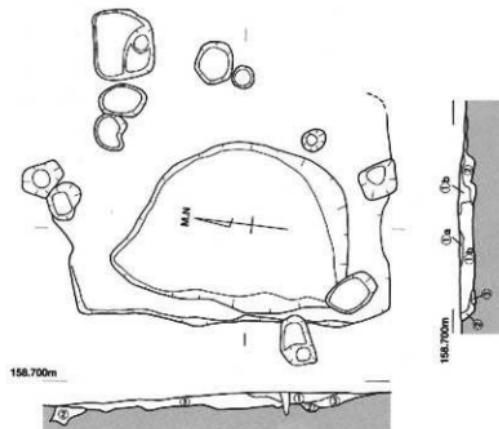


第6図 土層断面図 (S=1/80)



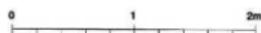
- ① 黒色土 (10 YR 1.7/1) 極細粒～細繊相当の御池軽石を30%含む 粘質土 しまりあり
 ② 黒褐色土 (10 YR 3/1) +明黄褐色土 (10 YR 6/6)
 極細粒～細繊相当の御池軽石を45%を含む 脳粘質土 しまりややあり

1号堅穴住居跡



- ① 黒色土 (10 YR 1.7/1) 極細粒～細繊相当の御池軽石を30%含む 粘質土 しまりあり
 ※a.bはaが若干御池軽石の含まれる割合が低い
 ② 黒褐色土 (10 YR 3/1) +明黄褐色土 (10 YR 6/6)
 極細粒～細繊相当の御池軽石を45%を含む 脳粘質土 しまりややあり
 ③ 黑褐色土 (10 YR 3/1) 極細粒～細繊相当の御池軽石を30%含む 脳粘質土 しまりあり

2号堅穴住居跡



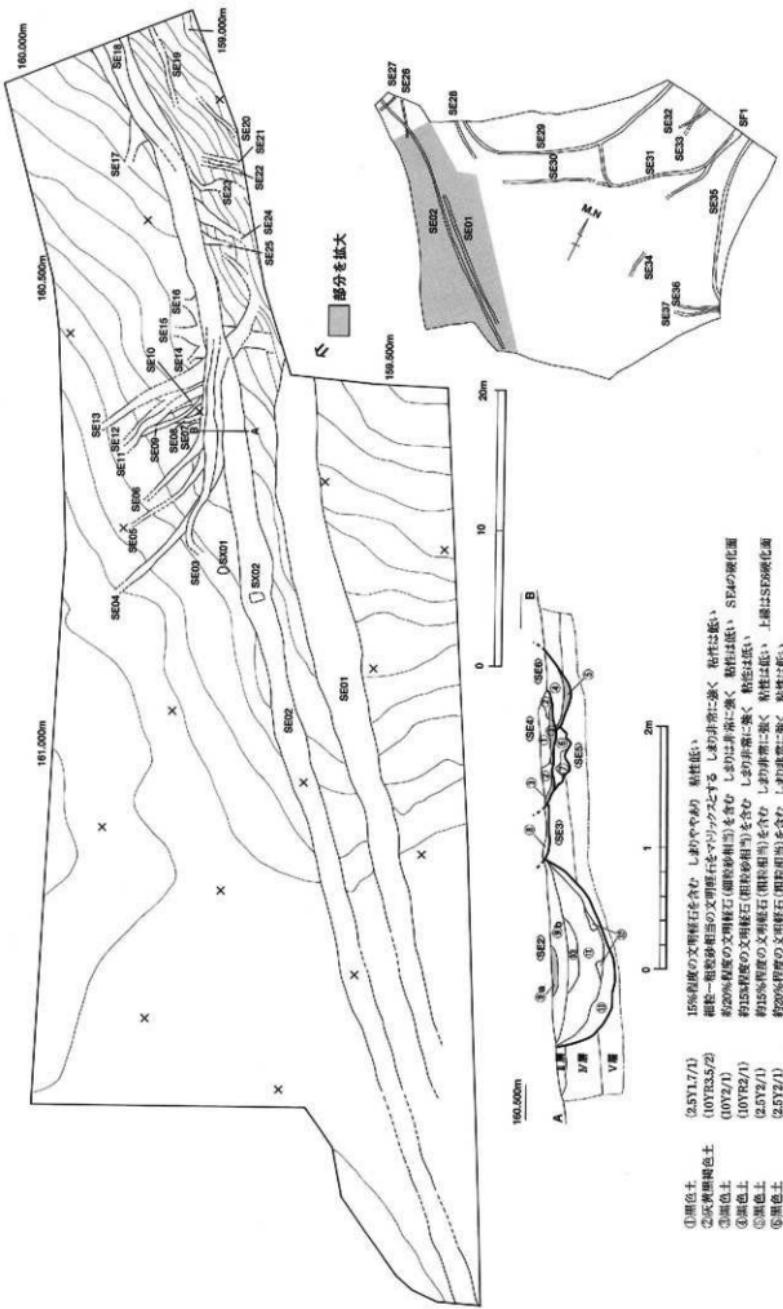
第7図 1・2号堅穴住居跡実測図 (S=1/40)

(2) 溝状遺構(SE)

A区では中世から近世の溝状遺構が37条確認されている。その内、A区-I(調査区西側部分)で25条が検出されている。溝の規模・断面形態・走行・切り合い関係については、下記の「溝状遺構一覧」を参照いただきたい。

遺構名	幅(m)	深さ(m)	断面形態	形態	切り合い関係等
SE01	1.4~3.6	0.2~0.50	U字型	北西方向に直線的に走行	
SE02	1.2~2.2	0.40~0.62	U字型	北西方向に直線的に走行	SE13~17, 23~25を切る 硬化面(2)
SE03	0.4~1.0	0.02~0.24	浅U字型	北方向に走行	SE2~6を切る 硬化面(1)
SE04	0.4~1.0	0.1~0.3	浅U字型	南西から緩やかにカーブして北西に走行	硬化面(1)
SE05	0.3~0.6	0.04~0.09	浅U字型	北東方向に走行	
SE06	0.2~0.6	0.06~0.10	浅U字型	北東方向に走行し屈曲して北西に走行	SE5, 7~13を切る 硬化面(1)
SE07	0.5+a	—	浅U字型	北西方向に走行	文明軽石埋土
SE08	0.3	0.06~0.16	浅U字型	北東方向へ走行	SE7を切る
SE09	0.6	0.05~0.07	浅U字型	南西方向へ走行し屈曲して北西方向へ走行	SE8, 10, SF1を切る
SE10	0.5+a	—	浅U字型	北西方向へ直線的に走行	文明軽石埋土
SE11	0.8~1.0	0.03~0.15	浅U字型	北東方向へ走行	SE9, 10, 12を切る
SE12	0.2+a	0.07	浅U字型	北東方向へ走行	
SE13	0.6~0.7	0.07	浅U字型	北東方向へ走行	文明軽石埋土
SE14	0.3~0.7	0.10	浅U字型	北東方向へ走行?	硬化面(1) 文明軽石埋土
SE15	0.8~1.8	0.17~0.20	浅U字型	東方向へ走行?	文明軽石埋土
SE16	0.3	0.10~0.13	浅U字型	南東方向へ走行?	硬化面(1) 文明軽石埋土
SE17	0.4~2.1	—	浅U字型	北東方向へ走行?	硬化面(1)
SE18	0.8~1.2	0.03~0.18	浅U字型	北西方向へ走行	SE2, 17を切る
SE19	0.3~0.4	0.03	浅U字型	北西方向へ走行	
SE20	0.5~0.7	0.03	浅U字型	南東方向へ走行	
SE21	0.2~0.7	0.02	浅U字型	東方向へ走行	
SE22	0.2~0.5	0.10~0.15	浅U字型	東方向へ走行	
SE23	0.4~1.5	0.10~0.15	浅U字型	東方向へ走行	
SE24	0.3~1.0	0.10~0.20	浅U字型	東方向へ走行	
SE25	0.2	0.03	浅U字型	南東方向へ走行	
SE26	0.7~0.9	0.10~0.20	浅U字型	北西方向へ走行	SE2を切る
SE27	0.6~0.8	0.20~0.30	浅U字型	北東方向へ走行	SE2を切る
SE28	0.7~0.9	0.30~0.40	U字型	北西方向へ走行	
SE29	1.2~1.5	0.40~0.55	U字型	南西方向へカーブしながら走行	埋土中から鹿泉窯系青磁(70)出土
SE30	0.75~1.0	0.15~0.25	U字型	北東方向へ走行	
SE31	0.8~1.2	0.40~0.50	U字型	北東及び北西方向へ走行	SE30を切る
SE32	0.7~1.0	0.20~0.40	浅U字型	北方向へ走行	
SE33	0.7~0.9	0.15~0.25	浅U字型	北方向へ走行	SE32を切る
SE34	0.6~0.9	0.15~0.25	浅U字型	北方向へ走行	
SE35	1.2~2.0	0.35~0.57	U字型	緩やかにカーブしながら南方向へ走行	
SE36	0.7~0.85	0.15~0.30	浅U字型	北東方向へ走行	
SE37	0.5~0.70	0.06~0.25	浅U字型	北東方向へ走行	

第1表 溝状遺構一覧



第8図 中・近世遺構分配図(S=1/350)・土壌断面図(S=1/40)

2.5YI 7/1	2.5YR 3.5/2	10YR 3.5/2	10YR 2/1	2.5Y 2/1	2.5Y 1/1	10YR 1.5/1	10YR 7/1.5	2.5Y 5/6	2.5Y 5/6	2.5Y 1.5/1
深褐色土	深灰褐色土	灰褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土
暗灰褐色土	灰褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土
深灰褐色土	灰褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土
暗灰褐色土	灰褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	浅褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土	深褐色土

15%程度の文明経石を含む
シルヤやアモリ
粘性低め
粗粒一細粒相当の文明経石をマトリクスとする。しかし非常に強く、粘性は低い。
SISの硬化速度は非常に早く、粘性は低い。
SISの硬化速度は非常に遅く、粘性は高い。
上端はSISの硬化速度

シラスの一次焼成（人為的なものである可能性が高い）
シラスの一次焼成の一次焼成の可能性が高い（半生別子の第Ⅲ層に相当）

(3)道路状遺構 (S F)

1号道路状遺構(S F 1 : 第9~11図)

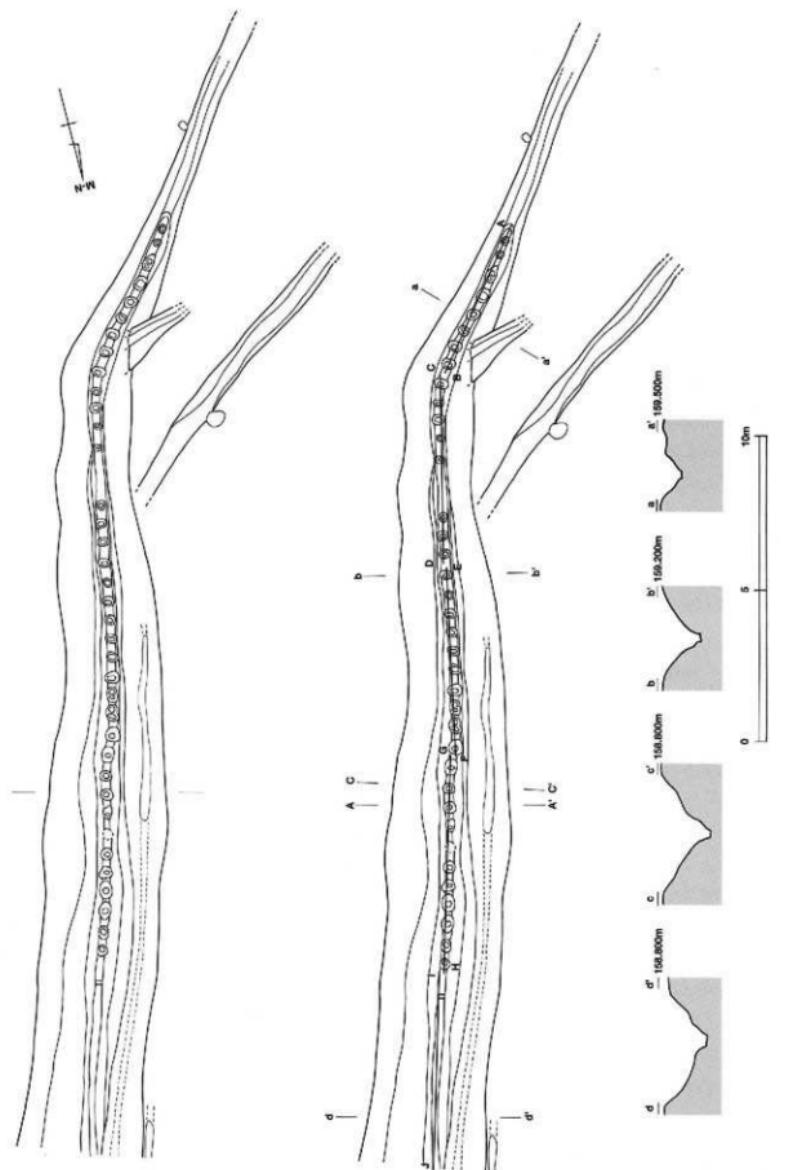
調査区の北西部、X・Y-28グリッドからY・Z・AA-29グリッドにかけて検出された。検出全長は直線距離にして約37.5mを測り、主軸はN-15°-Eと概ね北北西~南南西の方向を取るが、北端より約26mの地点で緩くカーブしてN-42°-Eへと転じている。幅員は上面で約0.7~4.3m、深さは完掘状態で最深部約1.6mを測るが、検出面は御池軽石層(第VI層)であるため本来はさらに規模の大きいものであったと推定される。断面は大きくV字状を呈している。掘削は最も深い地点でP14火山層混入層(第XII層)まで達していた。硬化面は主として2箇所に認められた。一方は西側立ち上がりの中腹付近にある傾斜変節点に乗るような状態で約6.2mにわたって検出された。硬化面から北側にも傾斜の変節は認められ、あたかも傾斜を下っていくかのような様相であるため、この部分にも硬化面が存在した可能性が高いと考えられる。硬化面は御池軽石を含む黒色土で形成されている(硬化面A)。他方は遺構底面に非常に良好な状態で残存していた。茶褐色の鉄分が析出した層理面を介在する6枚の層が観察された。P11火山灰を含む黒色土で形成されている(硬化面B)。

これら硬化面の前後関係について土層断面で観察してみると、硬化面Aを切るようにして硬化面Bを伴う掘り込みがなされたことが明らかである。断面を提示した部分では、硬化面Aのちょうど反対側にも同じような傾斜変節点があり、あたかも一連のものであるかのような印象を与えるが、他の部分では傾斜の変節や硬化面が明瞭に認められず、さらにはこれを硬化面の痕跡と仮定するならば復元される路面が約2.7mとなり、切り通しとしては、やや幅広の感が否めない。

よって硬化面Aが通行に耐えなくなったために中心を東側にぎらしながら掘り下げて路面を再生していったものと考える。ただし硬化面Aの直後に硬化面Bが構築されたものか、あるいは幾度かの破損・再掘削を繰り返した後、最終的に硬化面Bの深度に達したものかは、土層断面の観察からは明らかにできなかった。硬化面Bの下からピット列が検出されている。ピットは直線的距離にして約24mの間に37基確認された。途中にピットの空白部分があるが、残存状態が明瞭でなかったためであり、前後と同様な状態で残存していた可能性が高いと考えられる。ピットは長径約26~62cm、短径約19~43cmを測り、一部不整形のものが認められるが多くは楕円形を呈している。また路面の主軸方向に直行するように長径を持つピットが大半である。またこれらのピットのほとんどが道路状遺構の立ち上がりに切り込むようなかたちで掘削されている点が注目される。

先述したように硬化面Bには鉄分の析出した層理面が多く観察される。これら層理面の性格としては一枚一枚が路面であるか綿密な土木工事(版築)の痕跡であるかという二つの可能性が挙げられるが、立ち上がりに切り込むピットのプランにくわえて、硬化面を形成する土がいずれもP11火山灰を含むきわめて等質な上であり、むしろ層理面の存在によってのみ分層が可能であること、さらに消極的ながら最下の硬化面では路面としての幅員が不足するような印象があることなどから、後者の可能性が高いと判断される。道路状遺構に伴うこうしたピット列は、近接する大岩田村ノ前遺跡からも検出されており、いわゆる「波板状凹凸面」との関係が注目される。

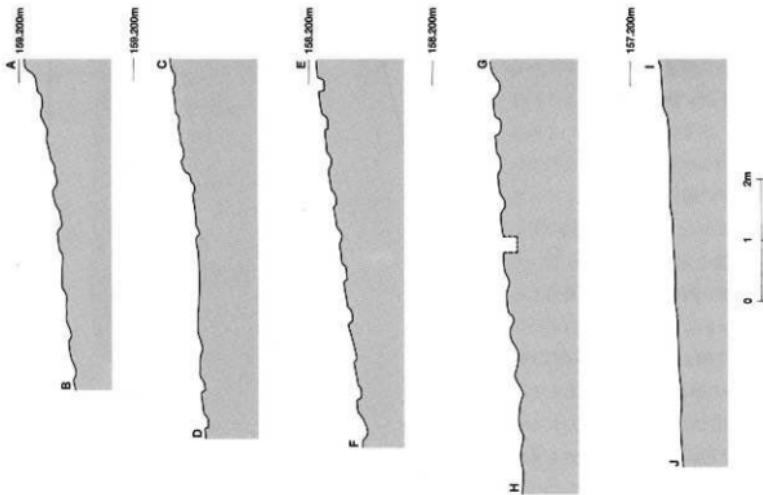
そうした観点からピット列の掘り込まれた場所を検討してみると、比較的傾斜の急な箇所であることが分かる。また一部のピットでは検出面で低レベル側にカーブの極を持つ三日月形の砂層が薄く堆積していた。大岩田村ノ前遺跡の場合、報告書掲載の図面から判断する限り、本遺跡と異なる平坦な地形に



第9図 1号道路状況測定測図(1) (S=1/160)

第10圖 1号道路状況測定図(2) (S=1/80)

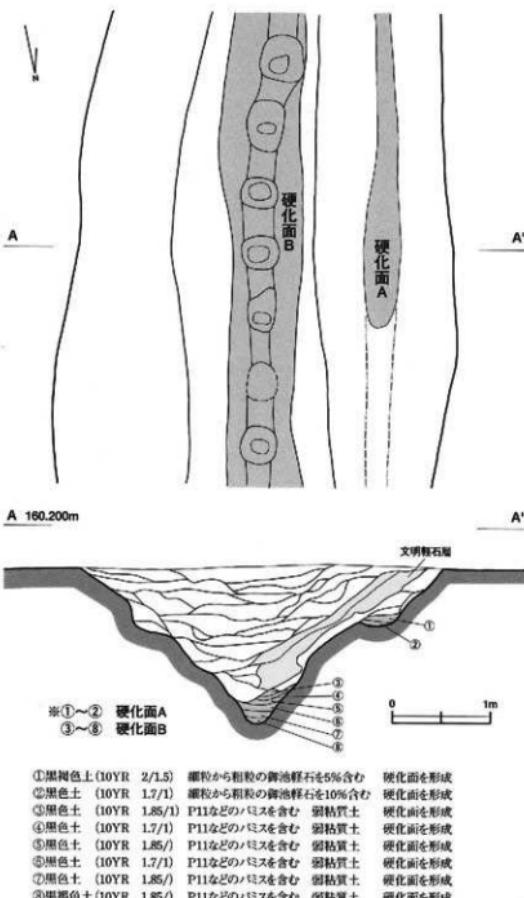
図版1 A区 1号道路状況測定図(2) (S=1/80)



構築された遺構であるにもかかわらずピット列が掘られているように見えるが、水平に補助線を引いてみると、平坦な中でも凹地での水の流れ易い部分にのみピットがあることが分かる。これら2遺跡の所見から結論を急ぐことはできないが、排水の便を図るという説に首肯するところがある。また遺跡例の場合にはそれに加えて、傾斜部の舗装(硬化面B)の崩落することを防止するといった目的があったかもしれない。

次に上層断面について検討を進めみたい。断面では文明3年(1471)発生の桜島噴火による火山灰と同定されている文明軽石の厚い堆積層が観察された。第11図では文明軽石層にうすく網をかけてある。調査時の所見ではこの層は不純物がほとんどない上、火山灰の粒径が下層ほど大きく上層にいくにしたがって小さくなっている。プライマリーな堆積と考えられる。またその堆積層は硬化面Bの真上にまで入り込んでいる。上層断面を提示した部分ではたまたま大きく失われているが当初はおそらくレンズ状に堆積していたものであろう。その硬化面Bであるが、表層は比較的良好な状態で残存している。これらの状況から、硬化面Bは文明軽石の降下によって直接路面がバックされたものと考えられる。この点からすると少なくとも硬化面Bの使用年代は15世紀中葉と見なしてよい。

問題はその後の再編成がどのように行われたかである。先述したように土層断面提示部では文明軽石層を大きく削るような掘り込みが認められるが、他の箇所では文明軽石がより良好な堆積状況を示しており、この部分については局所的な搅乱と考えたほうがよい。ただしそれ浅い掘り込みが全城にわたってなされていることは確実で、また他の道路状遺構では文明軽石層の上面が硬化している状態が看取された。すなわち文明軽石降下により道路が埋没した直後から復旧が行われたことになる。なお復旧後、この道路が最終的にいつまで使用されたかについては、遺構そのものから読み取ることは困難である。



第11図 1号道路状遺構実測図(部分)・土層断面図(S=1/50)

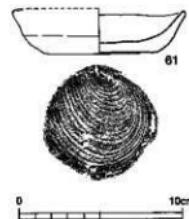
(4) 土壙墓 (S D)

1号土壙墓 (S D 1 : 第13図)

1号土壙墓はT-20グリッドの北側、南西から北東に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。検出面は第V b層である。耕作による攪乱が及んでいたために、実際の掘り込み面よりもかなり下がった面での遺構検出となっている。規模は長軸1.21m、短軸0.74mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さは6~14cmを測る。長軸方向はN-60°-Eを指す。埋土は文明輕石粒及び安永輕石粒(?)を20%程度含んだ粘性の高い黒色土の單一層である。出土遺物は床面から10~14cm程の浮いた位置で、北側壁面よりで土師質の环、東側壁面よりで銹着した状態の錢貨7枚が出土している。南部九州で多く認められる事例同様、7枚組の六道錢を副葬したものと想定される。

錢貨の詳細は第2表「1・2号土壙墓出土錢貨一覧」を参照いただきたい。

なお、覆土は篠にかけたが人骨・鉄釘等は確認できなかった。出土遺物は第12図に示している。61は土師質の环である。口唇部が3分の1程欠損しているがほぼ完形である。調整は内外器面ともに輪轍による回転ナデが施されている。外器面には部分的にススと鉄分が付着している。切り離しは回転糸切り技法で、板状圧痕のないやや上げ底気味の底部を持つ。

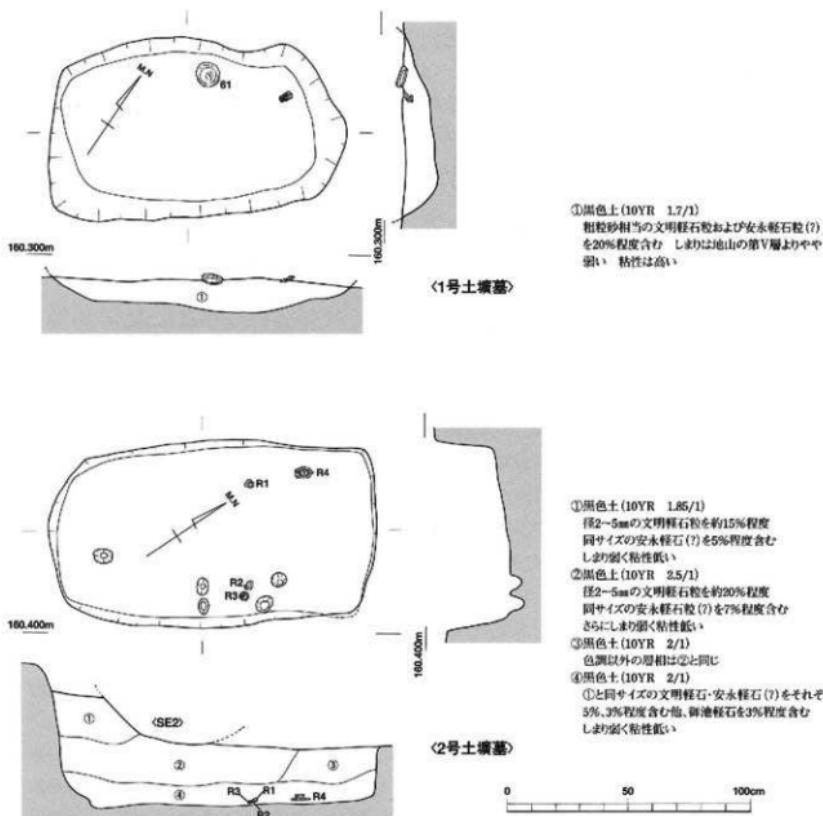


第12図 1号土壙墓出土遺物実測図(S=1/3)

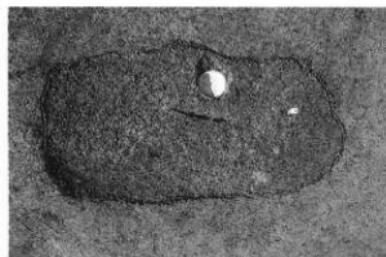
2号土壙墓 (S D 2 : 第13図)

1号土壙墓の南側2.4mの南西から北東へ緩やかに傾斜する斜面上に位置する。長軸1.34m、短軸0.76m、検出面からの深さ約25cmを測る。隅丸方形プランを呈し、長軸方向はN-34°-Eを指す。検出面は第V b層である。壙底から25cm以上の上位は溝状造構(S E 2)等により削平を受けている。埋土は基本的に黒色土層であるが文明・御池輕石の混入の様子で4層に分層している。第1層~3層には文明輕石粒、第4層には文明輕石粒に加えて御池輕石粒が僅かに含まれている。出土遺物は、銹着した状態の錢貨が3地点(第13図 北からR1・2・3と仮称する)、錢貨3枚が載った木質1点(第13図R4と仮称する)がほぼ床面で確認されている。北東部で検出した木質に載った3枚の錢貨は、上から「元祐通寶」、「崇寧通寶」、「元祐通寶」の順に重なっていた。残りの錢貨については短軸から20cm東側でほぼ直線上に並んだ状態で、R1は錢貨12枚、R2は8枚、R3は7枚、それぞれ銹着した状態で確認されている。また、各々の穿には特徴を同じくする縫が残存しているので、埋葬された時にはこれらの錢貨は一本の縫に通された縫錢状のものであったと推測される。縫が著しく剥離できないため錢貨名が分からぬものもあるが、「洪武通寶」が出土枚数の約4割近くを占めている。錢貨については第2表「1・2号土壙墓出土錢貨一覧」を参照いただきたい。

なお、埋土は全て篠にかけたが、骨片・鉄釘等は確認できなかった。木質は長さ65.0mm、幅47.0mm厚さ8mmのスギ材である。おそらく木棺の一部であったと考える。



第13図 1・2号土壤墓実測図 (S=1/20)



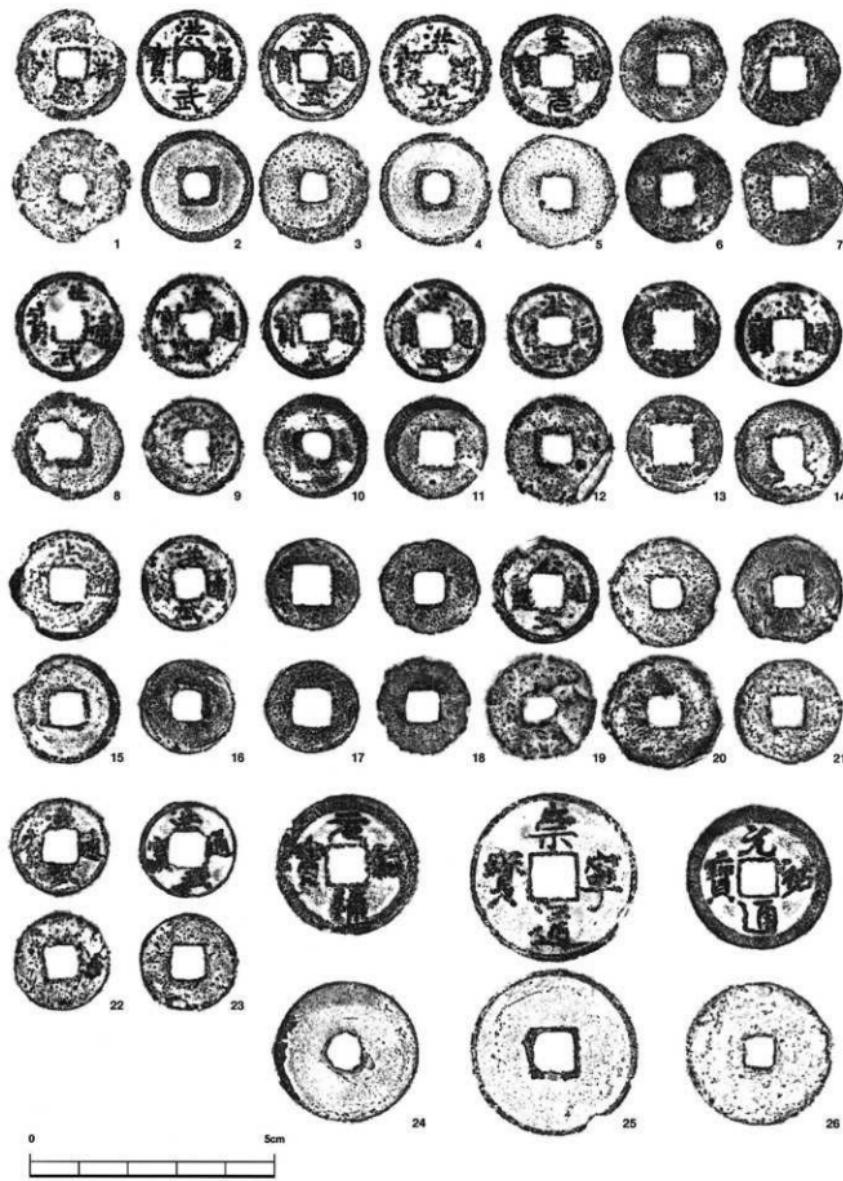
図版2 A区1号土壤墓検出状況



図版3 A区2号土壤墓完掘状況

出土遺構	擇回番号	錢貨名	王朝	初鑄年	外徑(mm)	内徑(mm)	重量(g)	備考
S D 1	1	洪武通寶	明	1368年	23.2	18.6	2.5	一部欠損
S D 1	—	祥符元寶	北宋	1008年	23.6	19.0	1.7	一部欠損
S D 1	2	洪武通寶	明	1368年	22.9	20.4	2.8	
S D 1	3	洪武通寶	明	1368年	22.9	19.1	2.5	
S D 1	4	洪武通寶	明	1368年	23.6	18.8	2.8	
S D 1	5	景祐通寶	北宋	1034年	23.2	19.1	2.6	
S D 1	—	洪武通寶	明	1368年	?	?	0.8	一部欠損
S D 2	—	?	?	?	22.6	—	(2.6)	(R 1)一部欠損
S D 2	—	?	?	?	21.6	—		(R 1)一部欠損
S D 2	6	無文錢(?)	?	?	21.8	—	1.6	(R 1)
S D 2	7	無文錢(?)	?	?	20.9	—	1.3	(R 1)一部欠損
S D 2	8	洪武通寶	明	1368年	22.1	19.1	2.2	(R 1)一部欠損
S D 2	9	無文錢(?)	?	?	20.1	18.7	(5.8)	(R 1)
S D 2		?	?	?	?	?		(R 1)
S D 2		?	?	?	?	?		(R 1)
S D 2		洪武通寶	明	1368年	21.6	19.0		(R 1)
S D 2	10	洪武通寶	明	1368年	21.5	18.2	1.4	(R 1)一部欠損
S D 2	11	洪武通寶	明	1368年	21.0	17.6	1.4	(R 1)一部欠損
S D 2	—	洪武通寶	明	1368年	21.4	17.9	0.9	(R 1)一部欠損
S D 2	12	洪武通寶	明	1368年	19.3	17.5	(2.4)	(R 2)
S D 2		?	?	?	21.6	—		(R 2)一部欠損
S D 2	13	無文錢(?)	?	?	19.8	—	0.9	(R 2)
S D 2	14	洪武通寶	明	1368年	21.3	18.7	1.3	(R 2)一部欠損
S D 2	15	洪武通寶	明	1368年	22.5	19.4	1.0	(R 2)一部欠損
S D 2	16	洪武通寶	明	1368年	19.4	16.8	1.2	(R 2)
S D 2	17	無文錢(?)	?	?	18.9	—	0.7	(R 2)
S D 2	18	無文錢(?)	?	?	20.3	—	1.2	(R 2)一部欠損
S D 2	—	?	?	?	22.2	18.1	1.4	(R 3)
S D 2	19	?	?	?	20.6	?	(2.5)	(R 3)一部欠損
S D 2		洪武通寶	明	1368年	21.4	17.4		(R 3)一部欠損
S D 2	20	無文錢(?)	?	?	22.4	20.0	2.2	(R 3)一部欠損
S D 2	21	無文錢(?)	?	?	21.8	19.6	1.8	(R 3)一部欠損
S D 2	22	洪武通寶	明	1368年	19.8	17.0	1.1	(R 3)
S D 2	23	洪武通寶	明	1368年	19.7	17.7	1.0	(R 3)一部欠損
S D 2	24	元祐通寶	北宋	1086年	30.0	23.2	7.0	(R 4)折二錢 紙背
S D 2	25	崇寧通寶	北宋	1102年	34.8	30.8	8.8	(R 4)当十錢 一部欠損
S D 2	26	元祐通寶	北宋	1086年	29.7	22.3	6.5	(R 4)折二錢 行書

第2表 1·2号土壤墓出土錢貨一覽



第14図 1・2号土壤墓出土銭貨拓影 (S=1/1)

(5) 構列(第15図)

調査区のR-27・28グリッドの北側で確認された。検出面は第V b層上面である。柱穴は北東方向に6基、北西方向に4基がほぼ直線上で並んで検出された。80cm前後の間隔で配置されており、径が約8~14cmの円形を呈し、検出面からの深さは5~23cmある。柱穴からの遺物の出土はなく、構築時期及びその性格、機能等については不明である。

(6) ピット群(第5図)

調査区内より3,000基余りのピットを検出している。確認面は第V b層である。調査区西部および北部で密集が見られる。これらのピット群は縄文・弥生両期にわたる遺構と推定されるが、共伴遺物も極少であり、規則性にも乏しかったので、その性格、機能などは特定できなかった。

(7) 包含層出土遺物(第16~18図)

第IV層(文明軽石を含む黒色土層)

及び第V層(御池軽石を含む黒色土層)

から出土している。出土遺物は約

1,300点であるが細片が多く団化で

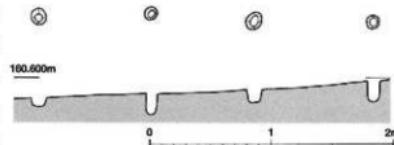
きたものは僅か44点である。1~

180.000m

28は縄文土器の深・浅鉢、42~56

は弥生土器の甕である。第16~18

図に図示・掲載する。



第15図 棚列ピット配置図 (S=1/40)

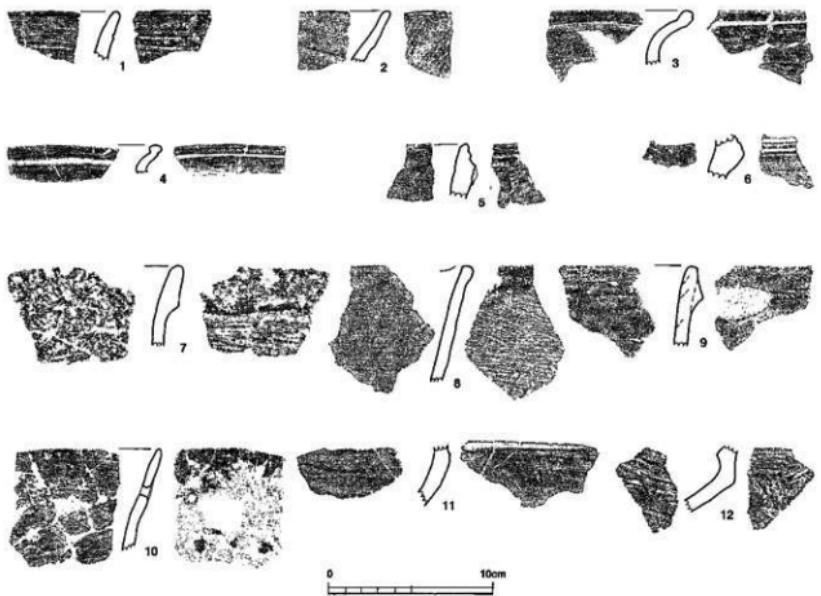
縄文土器 (第16・17・18図 1~28)

1. 全面横位のナデによる調整が施されている。外面は部分的に薄くススが付着する。
2. 内器面に指頭圧痕が残る。器面調整は全面ナデで、外器面は全体に真っ黒くススが付着している。
3. 精製浅鉢である。胴部が屈曲し、口唇端部は内湾している。口唇部直下外面には凹線が巡る。内外面ともミガキ調整を施し、内器面は部分的に炭化物の付着が見られる。
4. 精製浅鉢で縄文晩期に比定される黒川式土器である。口唇部直下外面には沈線が巡る。
5. 口唇端部外面に沈線が巡り、その下位の肥厚した部分には貝殻文が施されている。外面にはススが付着している。
6. 口唇部内面は剥落している。口縁部をやや肥厚させ、口唇部下位に2条の平行沈線を巡らしている。外器面には丁寧なナデが施され、ススの付着が見られる。
7. 粗製土器である。口縁部に断面三角形の幅広の粘土帯を貼付けており、口縁部に向かって僅かに外反する。内外面とも風化が著しく調整は不明である。外面にはススが付着する。

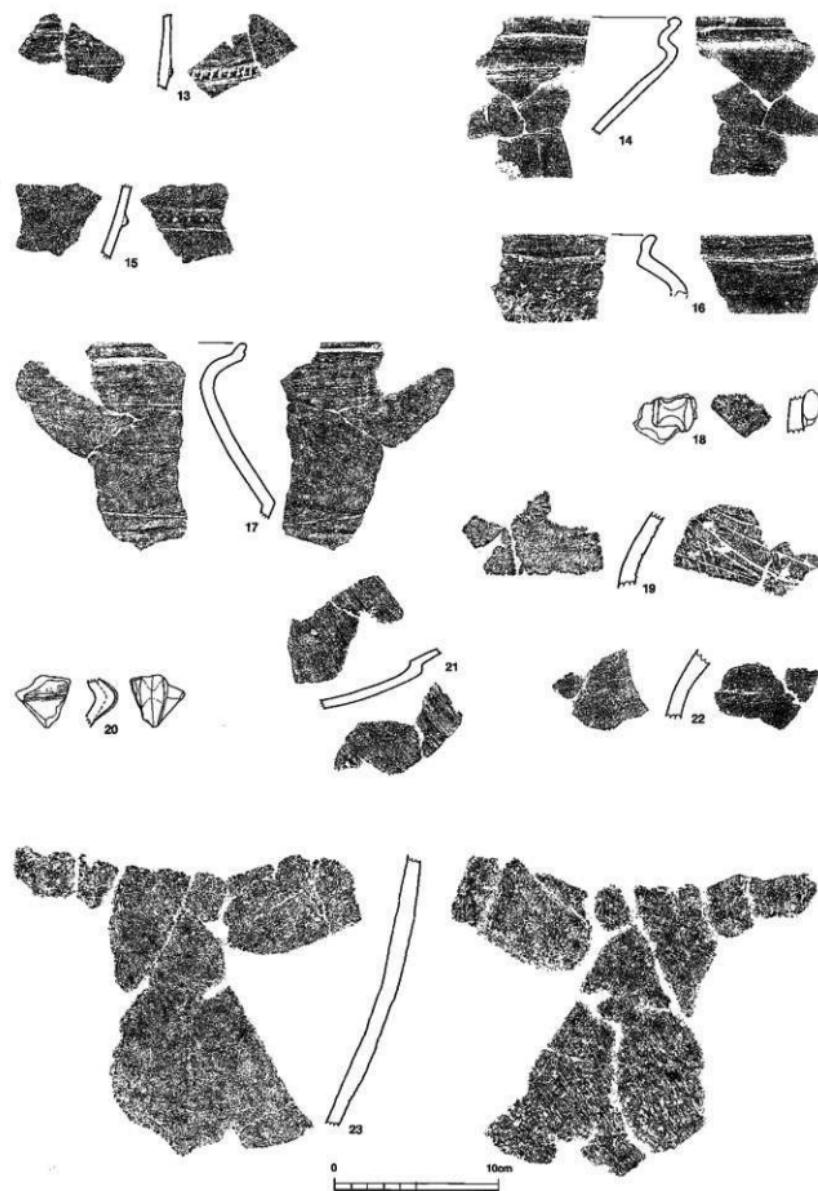
8. 口縁が若干肥厚する。器面調整は外面は斜め方向の条痕後横ナデ、内面は横方向の条痕が施されている。
9. 口唇部直下に断面三角形の貼付突帯を有し、外面には全体的に薄くススが付着する。
10. 口縁部に向かってわずかに開く器形である。口唇部下 2 cm に径 5 mm の穿孔が施してある。外器面は風化が著しく調整は不明である。
11. 精製浅鉢である。頸部に凹線を有する。外器面は横位のミガキ、内器面は風化し調整は不明である。外器面は部分的にススの付着が見られる。
12. 胴部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外湾していくものと思われる。外器面はススの付着が著しい。
13. 三角形の貼付け突帯に浅い刻み目が施されている。内外器面は横方向の条痕後ナデが施している。突帯下位にはススの付着が見られる。
14. 精製浅鉢で縄文晚期に比定される黒川式土器である。胴部が屈曲し、口縁部は短く外反する。口唇部直下外面には沈線が巡る。調整は内外面ともに口縁部から胴部上半は横位のミガキ、胴部下半は丁寧なナデが施してある。
15. 浅い刻み目を持つ貼付突帯を有する。外面にはススが付着し、内外面はナデにより仕上げられている。
16. 精製浅鉢である。口縁部が「く」字状に短く外反しており、口縁部内面には段を有す。内外器面ともミガキ調整であるが、一部風化している。
17. 精製浅鉢である。胴部は屈折している。口縁部は弧状に屈曲し、口縁端部は直線的に立ち上がり、口唇部直下外面には沈線を巡らしている。外面にススの付着が見られる。
18. 頸部に蝶ネクタイ状の貼付けを有する。外器面はススが付着している。
19. 粗製土器である。部分的に剥落しているが、横方向にやや深い沈線、斜め方向に平行な細く浅い沈線が施されている。外器面には全体的にススが付着する。
20. 精製浅鉢である。胴部屈曲部に蝶ネクタイ状の貼付突帯を有する。内外面の調整はミガキである。
21. 精製浅鉢である。口縁部外面が開曲し内面には段を有する。内外面は横方向のミガキ調整である。
22. 7と同一個体である。外器面にススの付着が見られる。
23. 粗製深鉢である。内外面とも風化ぎみで、胴部下位にはススの付着が見られる。
24. 底部は貼付であり、貼付痕を指によりナデ消している。器面調整は内外面ともナデである。
25. 底部の立ち上がりは直線的である。器面調整は底面はケズリ、外面は横ナデ後、縦・斜め方向のミガキ、内面はナデ調整である。
26. 平底を呈し、底部外面は張り出している。内面には炭化物の付着が見られる。
27. 底部外面端部が張り出している。全面ナデによる器面調整が行われている。
28. 底部が張り出さず直線的に立ち上がる器形を呈すると思われる。外器面には丁寧な縦方向のナデが施されており、部分的にススの付着が見られる。

弥生土器(第18図 42~56)

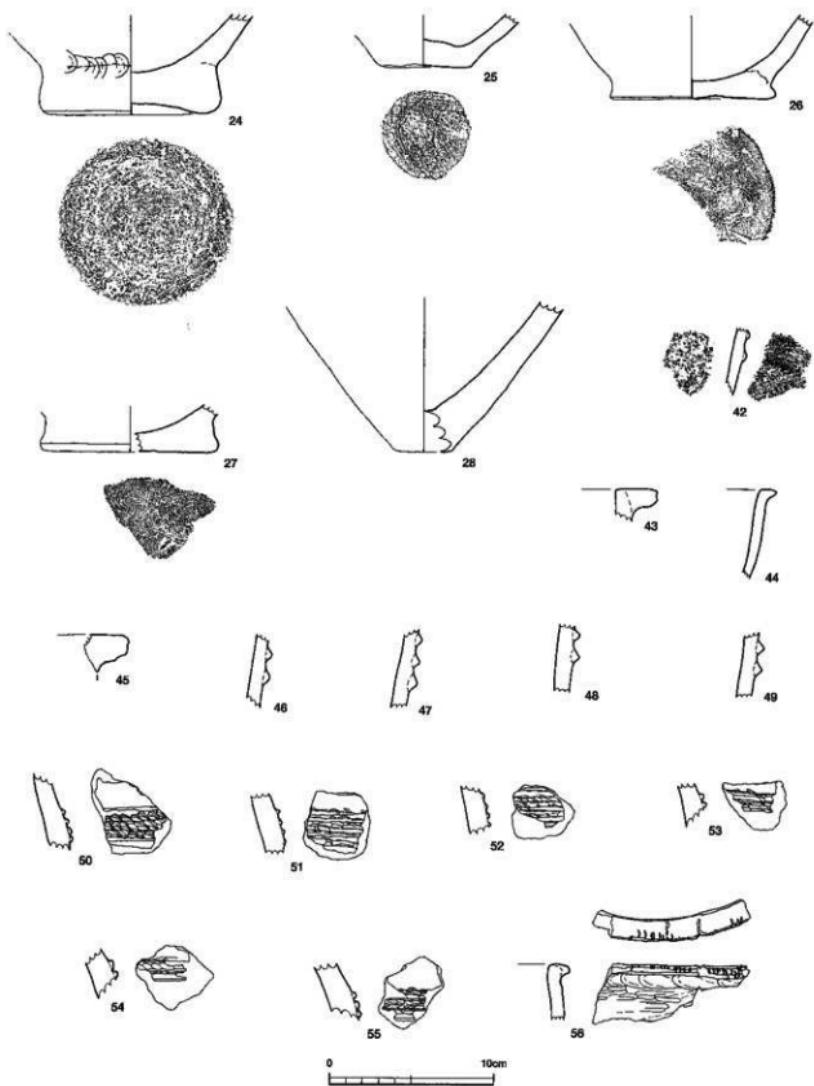
42. 2条の断面三角形の貼付突帯を有する。内外面ともに風化が著しく調整は不明である。
43. 口縁部端部に逆「L」字形の貼付突帯を有し、口縁部には凹線が見られる。器面調整は外面が横位のミガキ、内面はナデである。
44. 突帯はつまみ出しにより作られており、口唇部上面は平坦である。内外器面ともにナデ調整である。外面には全面ススの付着が見られる。
45. 口縁部端部に逆「L」字形の貼付突帯を有し、口縁部には凹線が見られる。口縁部外面に段を有する。
- 46~49. 2~3条の断面三角形の貼付突帯を巡らす。いずれもナデによる調整が施されているが、風化ぎみである。
- 50~54. 2~4条の断面三角形の粗雑な突帯をもち、各突帯には爪で斜め方向の刻み目が施されている。この突帯が貼付によるものか、つまみ出しによるものかは不明である。内外面ともナデによる調整が行われている。
55. 3条の断面三角形の貼付突帯を巡らしている。上2本の突帯下部直下にはヘラ痕跡を残す。調整は外面が横位のナデ、内面はナデである。
56. 口唇部上面は水平であり浅い刻み目が施されている。器面調整は外面が横方向のミガキ、内面は横方向のナデである。外面は部分的にススが付着する



第18図 A区出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



第17図 A区出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第18図 A区出土遺物実測図(3) (S=1/3)

第4節 B区の調査

1. 調査の概要

B区では、道路敷設部分の700m²（約11m×約70m）の調査を行った。現代の耕作に依る攪乱が随所で及んでいたが、第Ⅴa層上面で遺構検出を行った結果、土坑（1基）、ピット群が確認されている。遺物は53点（1.1kg）が出土している。内訳は縄文土器片35点（0.45kg）、弥生土器片18点（0.65kg）である。その後、第Ⅵ層上面（御池軽石層）まで掘り下げ、遺構の確認を行ったが認められなかったため調査を終了した。

以下、遺構ごとにその特徴と出土遺物について記述する。

2. 遺構と遺物

(1) 土坑（S C）

1号土坑（S C 1：第20図）

1号上坑は、AU-41グリッドの南西隅に位置する。規模は長軸2.8m、短軸1.94m、検出面からの深さは8.0~24.0cmを測る。隅丸長方形プランを呈し、長軸方向はほとんど東西の軸にのっている。検出面は第Ⅴa層であり、南側の3分の2程を調査の際の不注意により掘りすぎてしまっている。床面は平坦で、ほぼ床面で弥生土器片が13点出土している。埋土は黒色土で御池軽石粒の混入の割合で4層に分層している。出土遺物は第21図に示している。57、58はいずれも弥生土器の甕である。

57. 胸部である。1条の断面三角形の貼付突帯をもち、調整は外面が横方向のナデ、内面は斜め方向のナデである。外面には薄くススが付着する。

58. 底部である。厚みのある平底を呈し、底部から胸部に向かってシャープに立ち上がる。器面調整は外面が横位の刷毛目、内面はナデである。内部底面に炭化物が付着する。

（2）ピット群（第19図）

調査区内、第Ⅴa層で約120基のピットを検出した。調査区全域に分布しているが、中央部やや南側で集中が見られる。ピットの規模は経20~40cm、深さ20~40cmで円形及び楕円形を呈する。埋土の状況（文明軽石の混入の度合）で3種類に分類した。これらのピット群は中世の遺構と推定されるが、供伴遺物もなく、規則性にも乏しかったので、その性格機能等については特定できなかった。

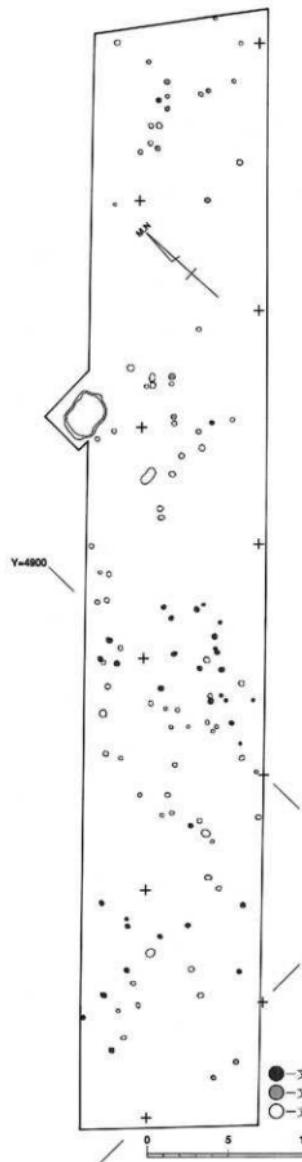
（3）包含層出土遺物（第21図）

第Ⅳ層および第Ⅴ層から出土しているが、遺物数は土坑内も含めても僅かに53点である。29は縄文土器の深鉢、59、60は弥生土器の甕である。第21図に図示・掲載する

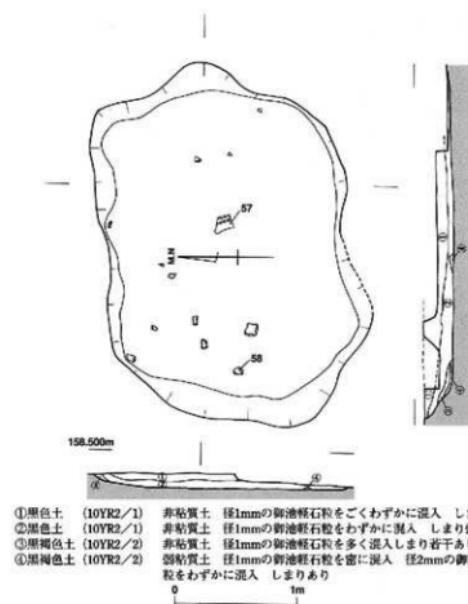
29. 胸部であり、やや「く」字状に屈曲する。外面にはヘラ撫でが施されている。

59. 口縁部である。「L」字状の口縁を呈し、口縁部上面は幅広の平坦面である。突帯貼付部には明瞭な指押さえ痕跡を残す。

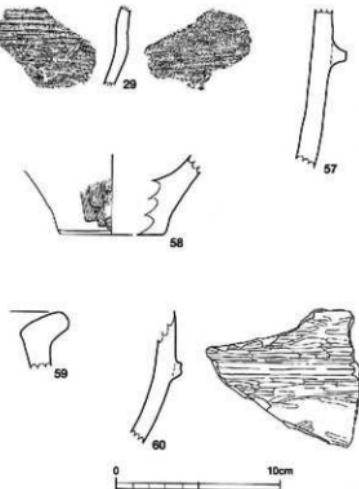
60. 胸部である。断面台形状の貼付突帯を有する。外面にはやや不明瞭であるがススが付着する。



第19図 B区遺構分布図 (S=1/300)



第20図 1号土抗実測図 (S=1/40)



第21図 B区出土遺物実測図 (S=1/3)

第5節 C区の調査

1. 調査の概要

C区は面積9,300m²、標高161～163mの北向きの緩斜面である。調査は第IV c層～第V a・b層を人力で掘り下げながら遺構検出をおこなった。その結果、竪穴住居跡(1軒)、掘立柱建物跡(1軒)、溝状遺構(1条)、土坑(4基)、ピット群を確認している(第22図)。遺物は約320点(7.5kg)が出土し、内訳は縄文土器片230点(5.6kg)、弥生土器片40点(0.6kg)等である。

C区の調査終了後、道路敷設部分に1号トレンチ～4号トレンチ(5m×20m)、調査区南端に5号トレンチ(5m×5m)、A区北端に6号トレンチ(5m×8m)の計6ヶ所で、第VI層以下の遺物包含層の確認を行った。その結果、縄文時代前期の土器片1点と旧石器時代の細石刃石器群を確認することができた。なお、「道路敷設部分の調査」については第6節を参照いただきたい。

以下、遺構毎にその特徴と出土遺物について記述する。

2. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡(S A)

1号住居跡(S A 1 : 第23図)

1号住居跡はE-12グリッド北部の東向きの緩斜面で確認した。第V a・b層での検出を試みたが、黒色土での遺構検出は難しく、検出面は第VI層の御池軽石層上面まで下がってしまった。そのため、壁の立ち上がり等は確認できなかった。さらに、東西に走行する現代の攪乱をうけているなど、現状は決して良好ではなかった。主柱穴は中央に1基で、径が30～60cm、深さ30cmである。壁際には約16～28cm、深さ12～28cmのピット約10基が確認されている。遺構の床面と比定される部分は、ほぼ平坦である。ピットの配置から住居跡と比定される部分は楕円形プランを呈し、長軸3.0m、短軸2.4mを測り、長軸方向はN-43°～Wを指す。縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての住居跡ではないかと考えている。

(2) 掘立柱建物跡(S B)

1号掘立柱建物跡(S B 1 : 第24図)

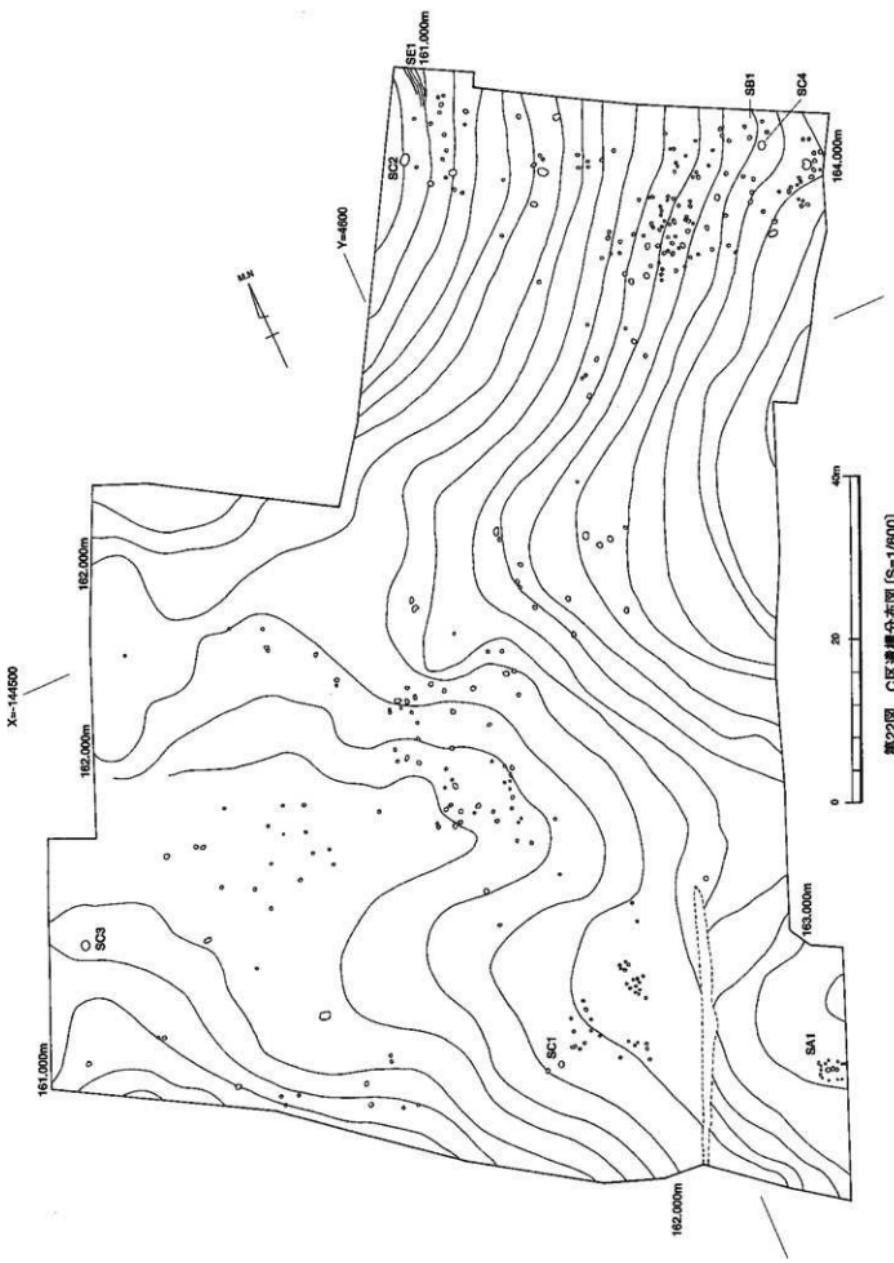
1号掘立柱建物跡は、P-16グリッドのほぼ中央に位置し、南1mに2号土坑がある。構造は桁行1間、梁行1間の東西棟である。規模は桁行2.06m、梁行1.60mを測る。棟方位はN-82°～Wを指す。柱穴の掘方は東側柱の北から第1柱が長軸0.42m、第2柱が長軸0.40m、西側柱の北から第1柱が長軸0.38m、第2柱が長軸0.36mのいずれも楕円形を呈し、深さ0.3～0.6mを測る。構築時期及び性格については不明である。また、遺構に共伴する遺物は出土していない。

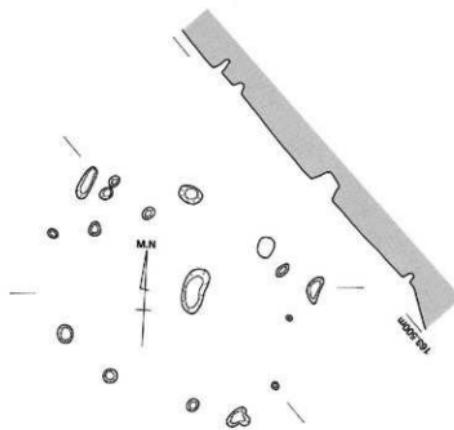
(3) 溝状遺構(S E)

1号溝状遺構(S E 1 : 第25図)

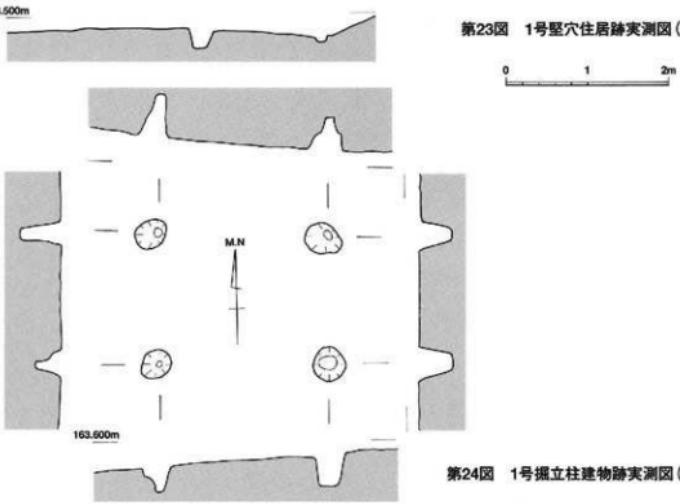
1号溝状遺構は、R-12グリッドに位置する。溝の北側は調査区外に延びる。第V b層上面で検出し

第22図 C区遺構分布図 (S=1/800)

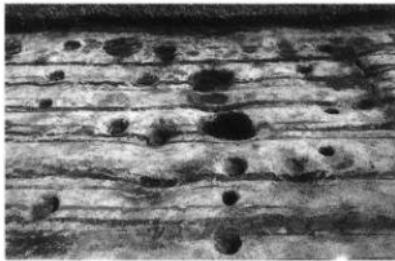




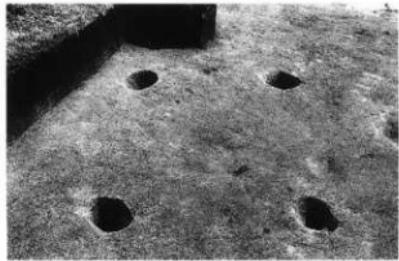
第23図 1号堅穴住居跡実測図 (S=1/60)



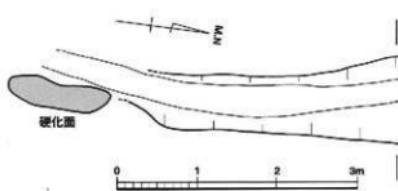
第24図 1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)



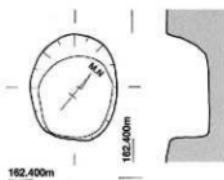
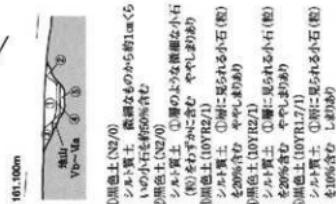
図版4 C区1号堅穴住居跡完掘状況



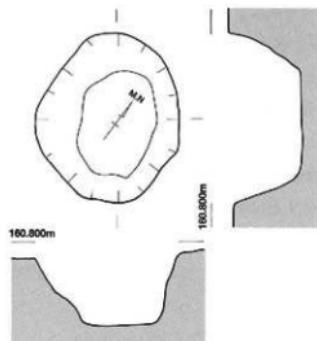
図版5 C区1号掘立柱建物跡完掘状況



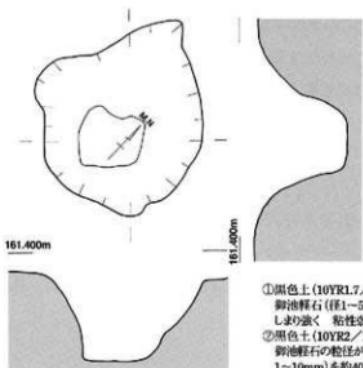
第25図 1号溝状構造実測図 (S=1/60)



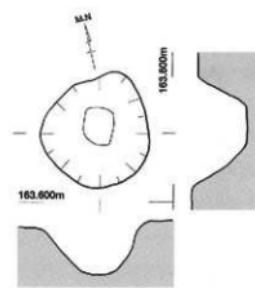
(1号土坑)



(2号土坑)



(3号土坑)



(4号土坑)

第26図 1~4号土坑実測図 (S=1/40)

た。長さ5.0m、溝幅0.6~1.04m、検出面からの深さは最深部で0.36mを測る。南から北に緩やかに傾斜している。構築時期及び性格については不明である。出土遺物はない。

(4)土坑(SC)

1号土坑(SC1:第26図)

1号土坑はG-9グリッドの南側に位置する。長軸方向はN-35°-Eを指す。規模は長軸0.86m、短軸0.70mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は黒色土で御池軽石の混入の割合で3層に分層できる。

2号土坑(SC2:第26図)

2号土坑はR-12グリッドの北西隅に位置する。長軸方向はN-46°-Eを指す。長軸1.40m、短軸1.16m、検出面からの深さ0.6mの楕円形を呈する。

3号土坑(SC3:第26図)

3号土坑はJ-4グリッドの北東側に位置する。長軸1.50m、短軸1.30m、検出面からの深さ0.7mの不整形プランを呈する。長軸方向はN-40°-Eである。

4号土坑(SC4:第26図)

4号土坑はP-16グリッドの西側に位置し、長軸方向はN-5°-Wを指す。規模は長軸0.90m、短軸0.90mのほぼ円形をなし、検出面からの深さ0.4mを測る。

1号土坑~4号土坑については、出土遺物もなく、構築時期及び用途については不明である。

(5)ピット群(第22図)

第V b層で約300基のピットを検出している。調査区内のほぼ中央部と南東部で集中が見られる。ピットの規模は径20~60cm、深さ10~60cmで円形及び楕円形を呈する。A区で検出されたピット群と同様に縄文・弥生両期にわたる遺構と推定されるが、共伴遺物も極少であり、規則性もなかったので、その性格・機能を特定できていない。

(6)包含層出土遺物(第27・28図)

第IV c層(文明軽石を含む黒色土層)及び第V a・b層(御池軽石を含む黒色土層)から出土している。出土遺物は約260点(5.2kg)であったが、殆どが細片であったり或いは摩耗が激しいために図化できたものは僅か12点である。30~41は全て縄文土器の鉢である。第27・28図に図示・掲載する。なお、弥生土器は全て細片で部位等が不明のため図化していない。

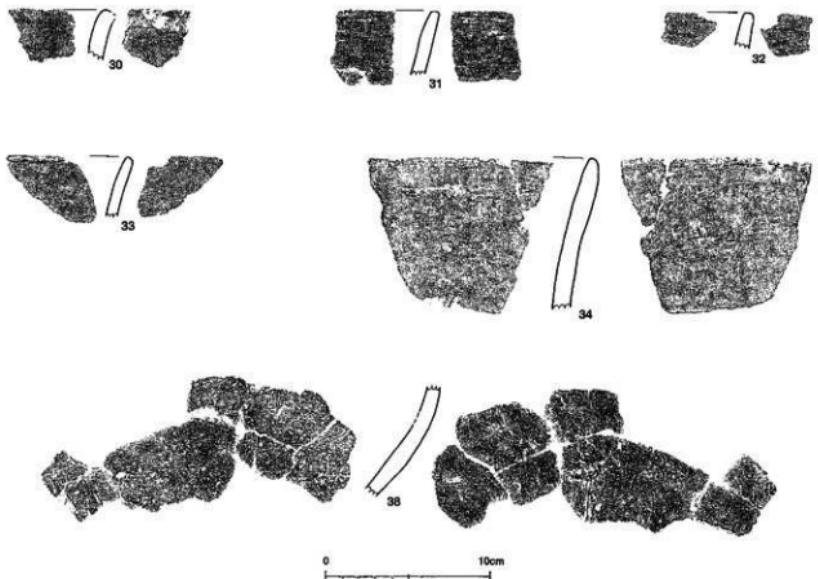
縄文土器(第27・28図 30~41)

30. 口唇部は殆どが剥落している。器面調整は外面が横ナデ、内面は丁寧な横ナデが施されている。外面には薄くススが付着している。

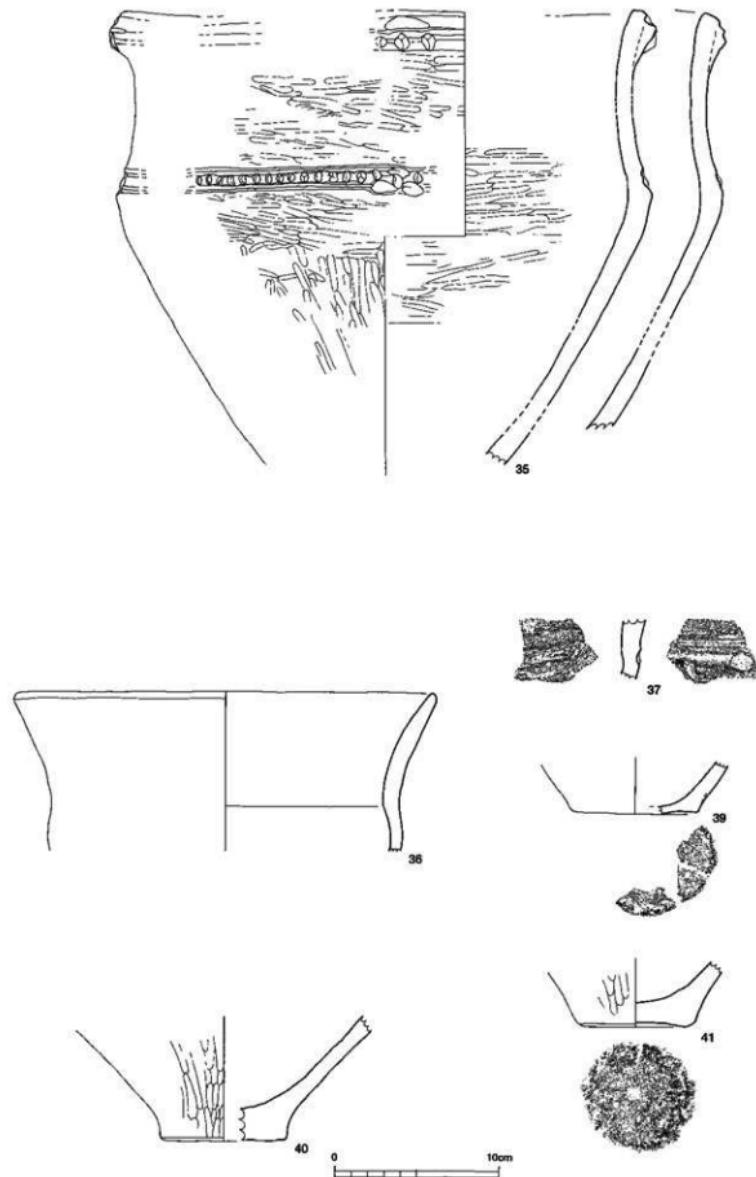
31. 口唇部上面に水平面を有し、器面調整は全面にミガキに近い丁寧な横ナデである。

32. 口唇部上面に水平面を持つ。内外面の調整はミガキに近い丁寧な横ナデである。外器面には薄くススが付着している。

33. 口唇部は横ナデにより平坦に成形されている。器面調整は外器面は斜め、内器面は横のミガキに近いナデが施されている。外器面にはスス、内器面には炭化物が付着している。
34. 口縁部に向かって僅かに外反する。内外器面ナデ調整で、外器面には部分的にススが付着する。
35. 本調査で最も大きい出土遺物である。口縁部が肥厚し、胴部が膨らむ器形である。口縁部外面と肩部に口縁部が肥厚し、胴部が膨らむ器形である。口縁部外面と肩部に凹線文や凹点文を施している。外器面は口辺部が横方向に、胴部の上部が横・斜め方向、下部が縦方向に研磨されているが、部分的にススが付着している。
36. 口縁部はやや外反ぎみに屈曲している。風化が著しくて調整は不明である。外面全体にススが付着する。
37. 2条の平行な凹線文を巡らした後、梢円形押圧を施している。器面調整は外面は丁寧なナデ、内面もナデである。
38. 内外器面はナデ調整である。外器面には部分的にススの付着が見られる。
39. 底部は厚みのない平底でやや外反しながら立ち上がる。内面には炭化物、外面にはススが部分的に付着している。全体的に風化し調整は不明である。
40. 厚みのある平底で、胴部へ直線的に立ち上がる。外面はミガキ、内面はナデ調整である。内面には部分的に炭化物が付着している。
41. 上げ底状であり、胴部への立ち上がりは直線的である。底部内面には炭化物がかなり厚く付着している。



第27図 C区出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第28図 C団出土遺物実測図(2) (S=1/3)

第6節 道路敷設部分の調査

道路敷設予定地の区域内に5箇所、他に1箇所のトレンチを設定し(第29図)、シラス(第XII層)直上まで掘り下げるところから、遺物包含層の確認を試みた。当遺跡の周辺では、アカホヤ火山灰層(第XIII層)が良好に堆積することから、当初、縄文時代早期の遺物包含層の確認が期待された。しかしながら、1～4・6号トレンチでは、土器片の出土はみられず、当該期に属する石器を検出したのみであり、5号トレンチにおいてP11火山灰層の下層(第XIb層)中に土器片1点を確認するにとどまった。これとても細片であり、特徴を把握することは困難なため、図化はおこなっていない。層位的に判断するならば縄文時代早期前半の位置付けが与えられよう。各トレンチ毎の遺物出土状況はつぎのとおりである。

1号トレンチ 本トレンチでは、遺物の出土は認められない。

2号トレンチ 第XIII～第XV層にかけて剥片5点を検出した。(第33図)

3号トレンチ 第Xa層中より石核を1点、第XIII～第XV層にかけて、細石刃核2点、細石刃4点、剥片5点、碎片7点を検出した。(第34図)

4号トレンチ 第XIb層中より石器1点を検出した。(第35図)

5号トレンチ 第XIb層中より石器1点、土器片1点を検出した。(第36図)

6号トレンチ 第V層中より石器1点を検出した。(第37図)

3号トレンチにおいて出土した剥片5点以外の遺物については図化をおこなっている(第31・32図)。なお、以下におこなう説明の便宜のため、石器に使用された黒曜石について、以下の類型を設ける。

黒曜石A類 夾雜物は少なく、黒色・透明を呈する比較的良好な石質。原礫面は細かな凹凸を有しザラザラとした印象を受ける。

黒曜石B類 石質は概ね良好であるが、A類と比較し混入物が目立つ。黒色もしくは灰黒色を呈し透明感を有する。風化により肌がヌメっとした印象を与えるようになることが、この石材の特徴である。

以下、個別の遺物について述べていく(第31・32図)。

細石刃(1～4) 1は完形品であり、背面左側縁上部には微細な剥離痕が観察される。平坦な單剥離打面を有する。頭部形状は台形を呈し、頭部調整が施されている⁽¹⁾。2は複剥離打面を有し、頭部調整は観察されない。頭部形状は台形を呈する。背面左側の末端部に破損がみられるが、意図的な折断とは考えにくい。この破損以前に主要剥離面とは逆方向からの剥離痕が観察される。3・4はいずれも背面に原礫面を残し、これともう一方の剥離面とが形成する稜上から二次加工が施されている。この二次加工はいずれも主要剥離面に切られており、細石刃剥離作業以前におこなわれていた作業面調整にあたるものと考えられる。3・4とともに原礫面を打面としており、頭部調整はみられない。上記の稜上調整により、頭部形状は改変を受けている。使用石材は4点いずれも黒曜石A類である。

細石刃核(8・9) 8は計3面の作業面を有し、a面→b面→c面の順に打面転移をなされたことが推定できる。a面の剥離角は84°、c面の剥離角は81°を測る。9の最終作業面であるa面の剥離角は70°を測る。b面に観察される剥離痕についてはa面における細石刃剥離のための打面調整とも考えられる。いずれの細石刃核も黒曜石A類の小礫を用いている。

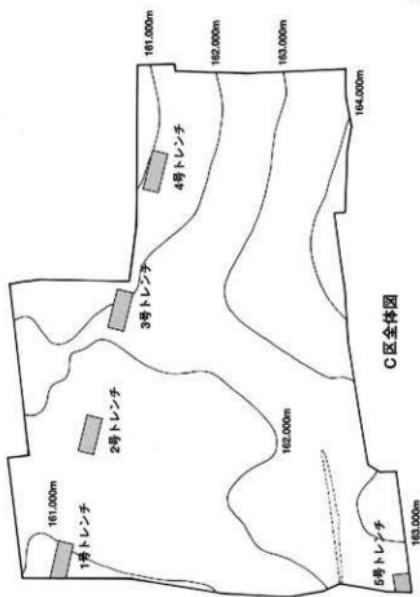
※等高線は衝池砾石上面

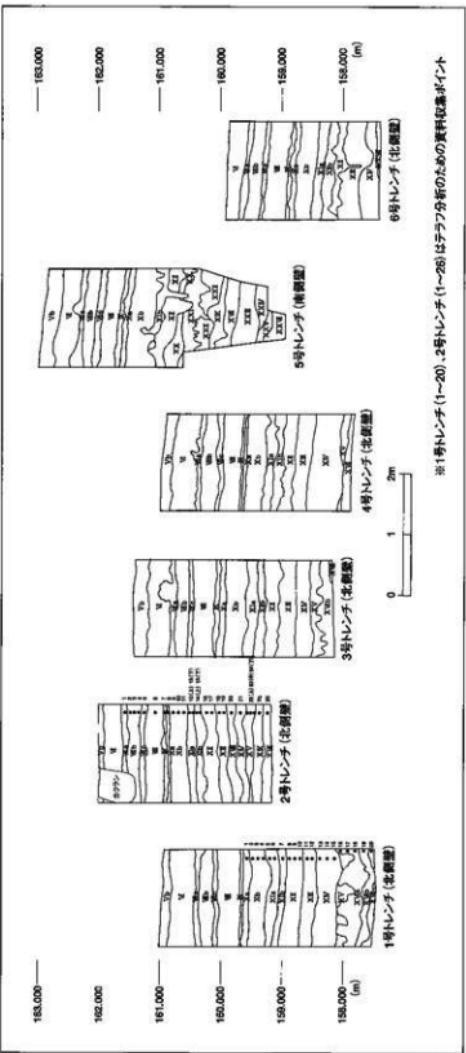
A区全体図



第29図 A-C区トレンチ位置図 (S=1/1,200)

C区全体図





* 1号トレンチ(1~20)、2号トレンチ(1~26)はグラフ分厚のための資料を示す点ポイント。

第30図 ～鉱山層の断面～

第30図1号～6号トレンチについては、第30図2号～6号トレンチを参照いただきたい。

第XVII層 褐土土(7.5R4-/4)	1号～3mmの褐色色粒子を少量 1mm以下の白色粒子を微量に含む 1mm以下に限る 153,000m	1号～3mmの褐色色 153,000m
第XIX層 褐土土(10YR4-/6)	155～160mmの褐色色 褐色色土(7.5TR4-/4)が混在する 1mmの褐色色 153,000m	155～160mmの褐色色 褐色色土(7.5TR4-/4)が混在する 1mmの褐色色 153,000m
第XX層 褐色土(7.5YR4-/4)	1号～3mmの褐色色 白色粒子を微量含む 1mm以下に限る 153,000m	1号～3mmの褐色色 白色粒子を微量含む 1mm以下に限る 153,000m
第XXI層 褐色土(7.5TR4-/4)	1号～3mmの褐色色 白色粒子を多量に含む 1mm以下に限る 153,000m	1号～3mmの褐色色 白色粒子を多量に含む 1mm以下に限る 153,000m
第XXII層 褐色土(7.5TR4-/4)	1号～3mmの褐色色 白色粒子を多量に含む 1mm以下に限る 153,000m	1号～3mmの褐色色 白色粒子を多量に含む 1mm以下に限る 153,000m
第XXIII層 黄褐色土(10YR5-/6)	1号～20mmの褐色色粒子 1～3mmの白色 153,000m	1号～20mmの褐色色 1～3mmの白色 153,000m
第XXIV層 褐土土(7.5TR4-/6)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m
第XXV層 褐土土(10YR4-/6)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m
第XXVI層 褐土土(7.5YR4-/6)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m
第XXVII層 褐土土(10YR5-/6)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m
第XXVIII層 褐土土(10YR6-/8)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m
第XXIX層 褐土土(10YR6-/8)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m
第XXX層 褐土土(7.5YR6-/8)	1号～20mmの褐色色 153,000m	1号～20mmの褐色色 153,000m

剥片(5～7, 10～16) 5は背面に残る原縁面の観察から、小縁素材からの剥離が推定される。連続して小型の縦長剥片が剥取されていることから、幅広の細石刃である可能性もあるが、主要剥離面にツインバルブを有するため、ここでは剥片と認定した。6・7はいずれも小型の不定形剥片である。10は原縁面を打面する剥片である。11は背面側からの加圧により折損している。以上、7～11は3号トレンチからの出土であり、11に黒曜石B類が用いられる他は、黒曜石A類を使用石材としている。

12～14はいずれも黒曜石B類を使用した剥片である。15・16は頁岩質の石材を用いた剥片である。15には折れ状の剥離面が複数みられるが、被熱によるハジケ痕の可能性も考えられる。頭部調整が施されている。16は、おそらく剥片剥離時の衝撃により、バルブ付近を起点として縦に亀裂が走り、剥片が半割されている。背面の剥片末端部および打面には原縁面が残存しており、そのカーブの度合いから、おおよそ拳大程度の原石形状が想定されよう。打面調整および頭部調整が観察される。以上12～17は2号トレンチからの出土である。

17は形態的特徴は細石刃核としてさし支えないものであるが、出土層位がアカホヤ直下のXa層であること。下位に存在する細石刃石器群とは石材も異なり、垂直分布のうえでも連続性が認められることから、縄文時代早期後半の所産と考えたい。なお、「大岩田上村遺跡」(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集 2001)では図示はしていないが、文中において「第Xa層中より二次加工の有る剥片を1点」と記したが、ここで石核と訂正する。

18～20はそれぞれ4号トレンチ～6号トレンチから出土した石鏃である。

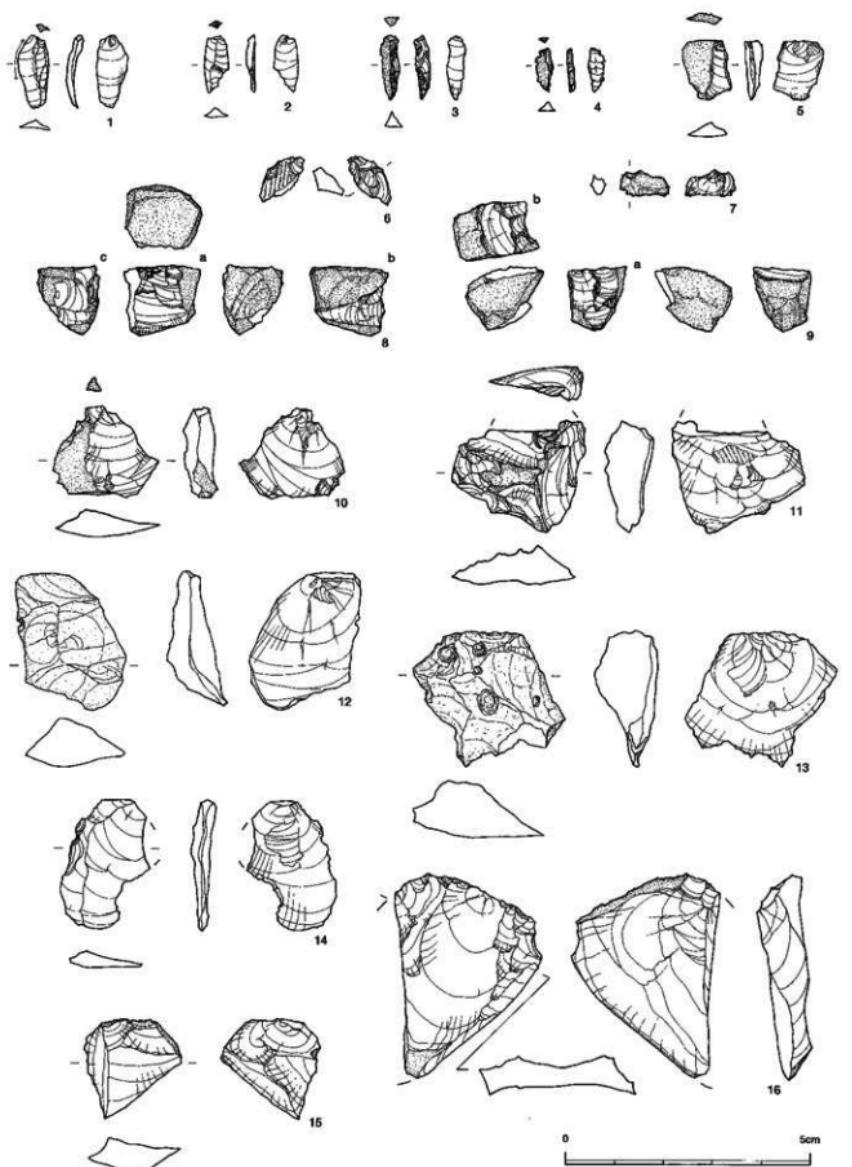
使用石材の齊一性、出土レベルのまとまりから判断するならば、11をのぞく3号トレンチ出土の遺物は細石刃石器群に属するものと捉えることが妥当であろう。また、ナイフ形石器などの成品の出土はみていないが、2号トレンチ出土の遺物の少なくともその一部および3号トレンチ出土の11については、その出土層位から推して、細石刃石器群を遡る時期の所産である可能性が高いものと考える。

遺物の出土がみられなかった他のトレンチも含めて、その地層堆積の観察所見からは、上記の石器群が残された当時のC区付近の地形は、比較的起伏に富んだ、現在よりもやや複雑な景観であったことが想像される。自然科学分析の結果なども踏まえ、これらの石器群がいかなる要因でこの地に残されたことになったのか、今後、考究の余地があろう。

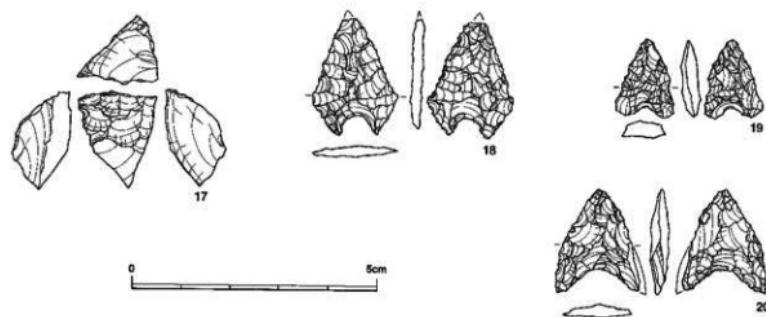
<参考・引用文献>

①頭部調整および弧溝形状の類型については、下記の文献を参考にした。

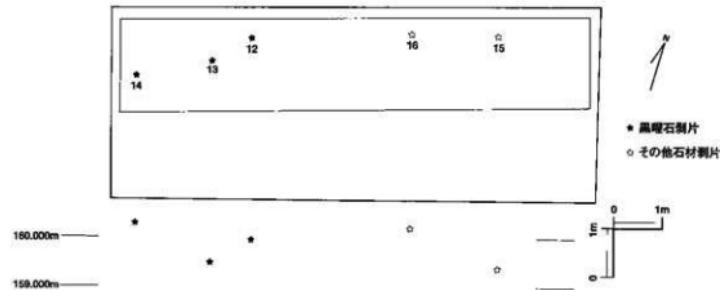
宮田栄二「縦片刃の打面と頭部調整について—細石刃製作技術の追求のために—」『九州旧石器』第4号 横昌信先生追悼記念特集号 九州旧石器文化研究会 2000



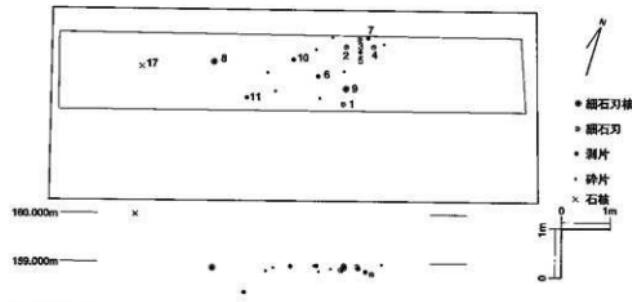
第31図 2・3号トレーニチ出土の石器(S=1/1)



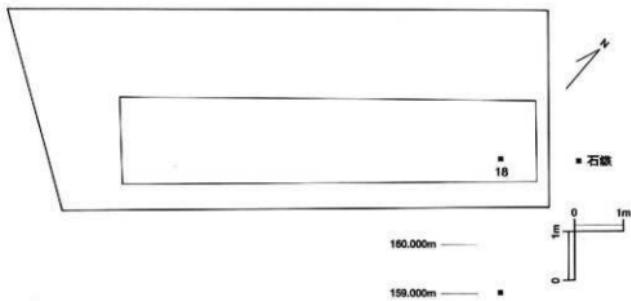
第32図 3~5号トレーニチ出土の石器 (S=1/1)



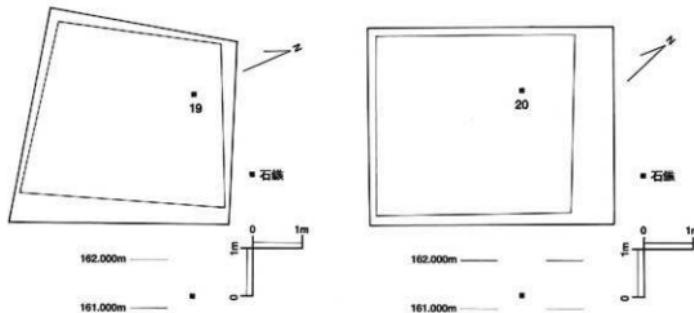
第33図 2号トレーニチ遺物出土状況



第34図 3号トレーニチ遺物出土状況



第35図 4号トレーンチ遺物出土状況

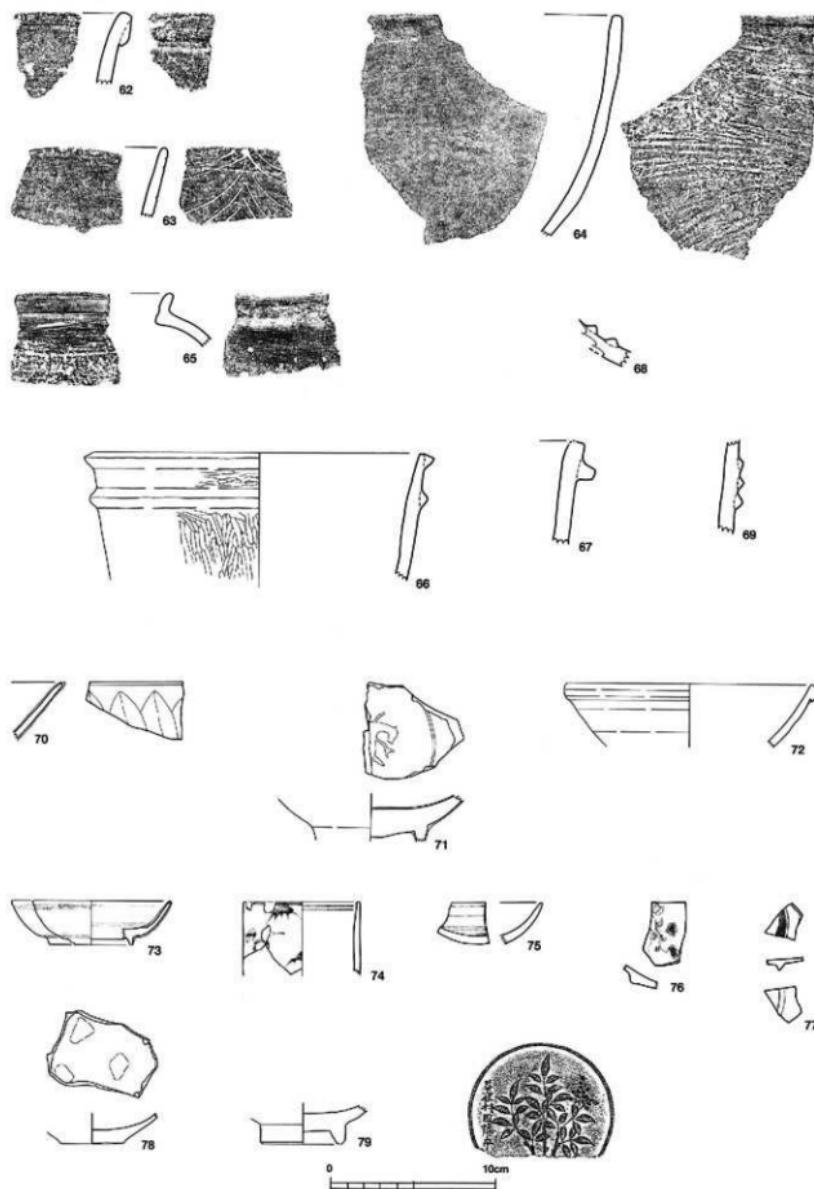


第36図 5号トレーンチ遺物出土状況

第37図 6号トレーンチ遺物出土状況



図版6 細石刃と細石刃核 (S号1/1 番号は第31図に対応)



第38図 参考遺物実測図 (S=1/3) 試掘トレンチ及び表探

第Ⅲ章 自然科学分析の結果

(株)古環境研究所

第1節 土層とテフラ

1. はじめに

宮崎県南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、霧島など多くの火山に由来するテフラ(火山碎屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が検出された大岩田上村遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と層折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、深掘トレチである(C区道路敷設部分確認トレチ)。

2. 土層の層序

深掘トレチでは、下位より灰色砂層(層厚20mm以上)、黄灰色砂層(層厚17cm)、円磨された黄色軽石混じり灰色砂層(層厚9cm、軽石の最大径42mm)、灰褐色砂質土(層厚26cm)、橙色軽石混じり褐色土(層厚24cm、軽石の最大径5mm)、若干色調が暗い褐色土(層厚26cm)、黄色軽石混じりで若干色調が暗い褐色土(層厚13cm、軽石の最大径4mm)、黄色細粒火山灰層のブロックや黄色軽石を含む褐色土(層厚7cm、軽石の最大径6mm)、暗褐色土(層厚12cm)、黒褐色土(層厚15cm)、黄色軽石を多く含み赤褐色スコリアを少量含む黒褐色土(層厚7cm、軽石の最大径9mm、スコリアの最大径2mm)、黄色軽石に富み赤褐色スコリアを少量含む黒褐色土(層厚13cm、軽石の最大径17mm、スコリアの最大径2mm)、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚6cm、軽石の最大径6mm)、黒色土(層厚7cm)、黒褐色土(層厚4cm)、成層したテフラ層(層厚37cm)、暗灰色土(層厚7cm)、灰色粗粒火山灰混じり黒色土(層厚20cm)、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚4cm、軽石の最大径5mm)、黄色軽石層(層厚24cm、軽石の最大径16mm、石質岩片の最大径2mm)、黄色軽石を多く含む暗灰色土(層厚29cm、軽石の最大径6mm)、暗灰色土(層厚16cm)が認められる(図1)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の褐色火山豆石を含む黄色軽石層(層厚3cm、軽石の最大径14mm、火山豆石の最大径4mm)と、上部の正の級化構造をもつ火山灰層(層厚34cm)からなる。火山灰層の下部(層厚7cm)は粗粒火山灰に富み、黄灰色を呈する。一方、その上部(層厚27cm)は、橙色細粒火山灰からなる。このテフラ層は、その層相から約6,300年前^{*1}に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978)に同定される。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

深掘トレチにおいて基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの試料を中心とした

16点を対象にテフラ検出分析を行い、示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 実体顕微鏡によりテフラ粒子の特徴や量を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。軽石としては、試料18(軽石の最大径1.6mm)、試料15～9、試料6～2に、スponジ状に発泡した白色軽石が認められた。とくに、試料14から11にかけて(軽石の最大径43mm)と、試料4～2(軽石の最大径29mm)に比較的多く含まれている。

火山ガラスはいずれの試料からも検出された。K-Ahより下位の試料には、約2.4～2.5万年前*に始良カルデラから噴出した始良入戸火砕流堆積物(A-Ito, 荒牧, 1969, 町田・新井, 1976)とそれに伴う始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる透明なバブル型ガラスが含まれている。また、K-Ahの上位では、そのほかにK-Ahに由来する淡褐色や褐色のバブル型ガラスが認められるようになる。試料21には、繊維束状に発泡した軽石型ガラスが特徴的に含まれている。

層相と以上の分析結果を合わせると、肉眼で認められたテフラ層のほかに、下位より試料21、試料18付近、14付近、試料4付近にテフラの降灰層準があると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

土層観察およびテフラ検出分析によって検出されたテフラと、示標テフラとの同定精度を向上させるために、4試料について温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により屈折率の測定を行うことになった。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を、表2に示す。試料21に含まれるテフラの火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.510である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.710-1.714である。試料18に含まれるテフラの火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.509である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.705-1.708である。

試料4には、重鉱物として斜方輝石や单斜輝石のほかに、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石(γ)と角閃石(n₂)の屈折率は、各々1.711-1.714と1.674-1.676である。さらに試料1の軽石層に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.509-1.511である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.724-1.729である。

5. 考察—示標テフラとの同定とその層位について

試料21に降灰層準のあるテフラは、層相、火山ガラスの形態や屈折率(低い屈折率のガラスはA-ItoあるいはAT起源)、さらに斜方輝石の屈折率などから、約1,15万年前^{**}に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ(Sz-S, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 奥野, 1996)と考えられる。試料18付近に降灰層準があるテフラは、斜方輝石の屈折率を、約9,500年前^{**}に桜島火山から噴出した桜島13テフラ(P-13, 小林, 1986, 奥野, 1996)のそれ(γ : 1.709-1.713, 古環境研究所, 未公表資料)と比較すると低い。したがって、約8,000年前^{**}に桜島火山から噴出した桜島12テフラ(P-12, 小林, 1986, 奥野, 1996)に由来している可能性が考えられる。しかし、桜島火山起源の繩文時代のテフラについての岩石記載学的資料が少ないことから、高精度の同定は今後の課題としたい。

試料14付近に降灰層準があるテフラのうち、黄色軽石については、その層位や層相から桜島嫁坂軽石(Sz-Ym, 早田, 1997)に由来する可能性が高い。このテフラは、層位や層相などから、約7,500年前^{**}に桜島火山から噴出した桜島11(P-11, 小林, 1986, 奥野, 1996)に同定されると思われる。また同じような層準にある赤褐色スコリアは、その岩相や層位などから、約7,400~8,200年前^{**}に霧島火山から噴出した霧島蒲牟田スコリア(Kr-Km, 井ノ上, 1988, 早田, 1997)に由来すると考えられる。

K-Ahを挟んでその上位の試料4付近に降灰層準があるテフラは、その層位や角閃石を少量ながら含むこと、さらに斜方輝石や角閃石の屈折率などから、約5,500~5,700年前^{**}に池田湖から噴出した池田湖テフラ(Ik, 成尾・小林, 1984, 奥野, 1996)に由来すると考えられる。さらにその上位にある、試料1の軽石層は、層相、火山ガラスの屈折率、重鉱物の組み合わせ、さらに斜方輝石の屈折率などから、約4,200年前^{**}に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池軽石(Kr-M, 町田・新井, 1992, 早田, 1997)と考えられる。

6. 小結

大岩田上村遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より桜島薩摩テフラ(Sz-S, 約1.15万年前^{**})、桜島嫁坂軽石(Sz-Ym, 約7,500年前^{**})および霧島蒲牟田スコリア(Kr-Km, 約7,400~8,200年前^{**})、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前^{**})、池田湖テフラ(Ik, 約5,500~5,700年前^{**})、霧島御池軽石(Kr-M, 約4,200年前^{**})などの示標テフラを検出することができた。

*1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。一般に曆年代とは異なることに注意。

<参考・引用文献>

- 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269。
新井房夫(1993) 温度一定屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148。
岸松重雄(1969) 鹿児島県国分地域の地質と火成堆積物。地質誌, 75, p.425-442。
池田晃子・奥野 光・中村俊夫・萬井正明・小林哲夫(1995) 南九州、姶良カルデラ起源の大崩壊下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-379。
井ノ上幸造(1988) 霧島火山群萬千鶴複合火山の噴火活動史。岩紋, 83, p.26-41。
小林哲夫(1986) 桜島火山の形成史と火成堆積物。文部省科学省自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(研究代表者 宮崎義雄), p.137-163。
Macchida,H(1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japanzrecent progress. Quat. Res. 39,p.194-201.
町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—姶良火碎流火山灰の発見とその意義。科学, 45, p.339-347。
町田 洋・新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163。
町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトランティス。東京大学出版会, p.276。
松本英一・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987) 姶良Trn火成灰(AT)の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83。
成尾英仁・新井房夫(1984) 池田カルデラ形成時の降下堆積物(テフロ)。火山, 29, p.148。
奥野 光(1996) 南九州の第四紀末テフラの加速器C年代(予報)。名古屋大学加速器質量分析計実績報告書, 7, p.89-109。
早田 鮎(1997) 風土と自然環境。宮崎県史通史編, p.3-7.

表1 テフラ検出分析結果

地點	試料	巣石	量	色調	最大粒径	量	火山ガラス		色調
							深掘トレンチ	2	
スコリア	▲▲				4	++	白	.9	+
火山豆石	◎●				6	+	白	1.3	+
粗粒火山灰	▨▨				7	++	白	bw,gn	-
火成火成灰	△△				9	+	白	2.1	++
火成火成灰	△△				10	+	白	1.9	+
火成火成灰	△△				11	++	白	4.3	+
火成火成灰	△△				12	++	白	3.1	++
黑色土	▨▨				14	++	白	4.3	++
黒褐色土	▨▨				15	+	白	3.9	+
黒褐色土	▨▨				16	-	白	bw,gn	-
暗灰~暗褐色土	▨▨				18	+	白	1.6	+
暗灰~暗褐色土	▨▨				20	-	白	bw,gn	-
暗灰~暗褐色土	▨▨				21	-	白	++	++
暗灰~暗褐色土	▨▨				22	-	白	bw,gn	透明
暗~灰褐色土	▨▨				24	-	白	bw,gn	透明

+++ : とくに多い、++ : 多い、+ : 中程度、- : 少ない、- : 見められない。
最大粒径の測定は、mm. bw : バック型, pm : 鮫石型。

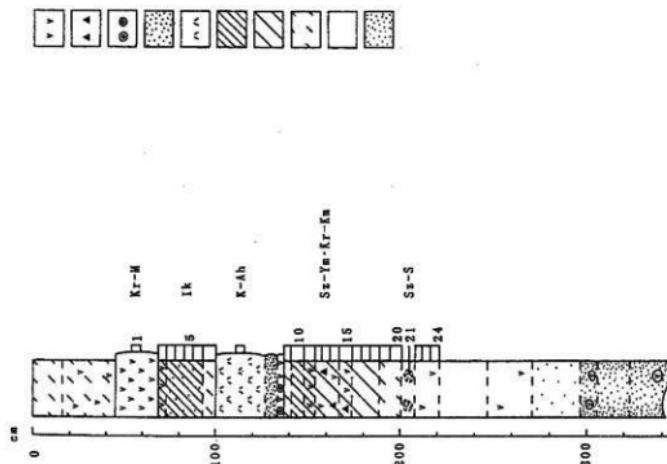


表2 折射率測定結果

地點	試料	火山ガラス (n)	重複物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (m)
深掘トレンチ	1	1.509-1.511	opn>opt	1.724-1.729	-
	4	-	opn>opt (ba)	1.711-1.714	1.674-1.676
	18	1.499-1.509	opn>opt	1.705-1.708	-
	21	1.499-1.510	opn>opt	1.710-1.714	-

屈折率の測定は、測定一定面屈折率測定法(原井, 1972, 1993)による。
opn : 斜方輝石, opt : 角閃石, ba : 単斜輝石, m : 角閃石。

図1 深掘トレンチの土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第2節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_4)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、3号トレンチ・4号トレンチから採取された計25点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-6}g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チマザサ節・チマキザサ節)は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亞科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を

行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、オオムギ族(ムギ類の穎の表皮細胞由来)、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B(大型)、モロコシ属型、シバ属、Bタイプ(ヌマガヤ属類似)

[イネ科ータケ垂科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

[イネ科ーその他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

現表土(試料1)からA-Ito直上層(試料40)までの層準について分析を行った。その結果、A-Ito直上層(試料40)では、ヨシ属、ウシクサ族A、Bタイプ、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。A-Itoの上層(試料39)からSz-S直下層(試料33)にかけては、ミヤコザサ節型が大幅に増加しており、ヨシ属は見られなくなっている。Sz-S混層(試料31)では、クマザサ属型がやや増加し、キビ族型やススキ属型が出現している。Sz-Ym(P11)・Kr-Km直下層(試料28)にかけては、ススキ属型やウシクサ族Aが増加しており、クマザサ属型やミヤコザサ節型は減少傾向を示している。Sz-Ym(P11)・Kr-Km混層(試料26)からK-Ah直下層(試料22)にかけては、メダケ節型やネザサ節型が出現・増加しており、試料22ではモロコシ属型が出現している。K-Ah層(試料21)では、K-Ah直下層とおおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。

K-Ah直上層(試料20)では、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型なども検出された。Kr-M直下層(試料16)にかけては、ネザサ節型が大幅に増加しており、樹木(その他)が出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。

Kr-M混層(試料14)では、Kr-M直下層とおおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。Kr-M直上層(試料12)では、ススキ属型が増加しており、その他の分類群も増加傾向を示している。Sz-3直下層(試料5)にかけては、メダケ節型やネザサ節型が大幅に増加しており、試料5と試料6ではイネが検出された。イネの密度は1,000個/g未満と低い値である。Sz-3直上層(試料4)では、オオムギ族(ムギ類の穎の表皮細胞由来)やシバ属が出現しており、メダケ節型やネザサ節型は減少している。現表土(試料1)にかけては、イネが大幅に増加しており、マダケ属型および樹木起源のブナ科(シイ属)やクスノキ科が出現している。イネの密度は、試料1では7,500個/gと高い値であり、試料3でも3,600個/gと比較的高い値である。

おもな分類群の推定生産量によると、Sz-Ym(P11)・Kr-Km直下層より下位ではおおむねミヤコザサ

節型が優勢であり、それより上位層ではおむねメダケ節型やネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

始良入戸火砕流堆積物(A-Ito, 約2.4~2.5万年前)の直上層の堆積当時は、クマザサ属(おもにミヤコザサ節)などのササ類を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属やイネ科Bタイプ(スマガヤ属?)などが生育する湿地的なところも分布していたと推定される。その後、桜島薩摩テフラ(Sz-S, 約11,500年前)直下層にかけては、クマザサ属(おもにミヤコザサ節)などのササ類を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくに細石器が検出されたSz-Sの下位層準ではミヤコザサ節が繁茂する状況であったと推定される。

タケ亜科のうちメダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率(両者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の氷期一間氷期サイクルの変動と一致することが知られている(杉山・早田, 1996, 杉山, 2001)。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷~冷涼な気候条件で推移したと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている(高瀬, 1992)。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

Sz-Sの上層から桜島嫁坂軽石(Sz-Ym(P11), 約7,500年前)および霧島蒲牟田スコリア(Kr-Km, 約7,400~8,200年前)の直下層にかけては、スキ属やチガヤ属などが増加し、クマザサ属は減少したと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、スキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、日当りの良い比較的開かれた環境であったと推定される。

Sz-Ym(P11)・Kr-Km混層では、メダケ属(メダケ節やネザサ節)を主体としてスキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生に移行したと考えられ、クマザサ属はあまり見られなくなったと推定される。このような植生変化は、完新世における気候温暖化の影響によるものと考えられる。メダケ節のメダケは、高さ7m、直径3cmになり、建築用材や竹細工の材料などとして有用である(室井, 1969)。鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)直下層にかけては、メダケ属(メダケ節やネザサ節)がさらに増加したと考えられ、キビ族やモロコシ属なども生育していたと推定される。

その後、K-Ahの堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、K-Ah直上層では比較的早い時期にK-Ah直下層とほぼ同様のイネ科植生が回復したと推定される。このような比較的早い植生の回復には、現在よりも平均気温が約2℃前後高かったとされる当時の高温・多湿な気候環境の影響が大きいと考えられる。霧島御池軽石(Kr-M, 約4,200年前)直下層にかけては、メダケ属(メダケ節やネザサ節)が繁茂する状況であったと考えられ、部分的にスキ属やチガヤ属なども生育していたと推定される。また、周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。

その後、Kr-Mの堆積によって当時の植生は破壊されたと考えられるが、スキ属やチガヤ属、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などのイネ科植物は比較的早い時期に再生したと推定される。桜島文明軽石

(Sz-3, 1471年)直下層の堆積当時は、メダケ属(メダケ節やネザサ節)を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる草原的な環境であったと考えられ、調査地点もしくはその近辺では稻作が行われていたと推定される。遺跡の立地や周辺の植生から、ここで行われた稻作は畑作の系統(陸稲)であった可能性が考えられる。

Sz-3直上層から現表土にかけては、継続的に稻作が行われていたと考えられ、ムギ類の栽培も行われていたと推定される。当時の遺跡周辺には、ブナ科(シイ属)やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられ、マダケ属またはホウライチク属も見られたと推定される。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとして利用価値が高いが、これらの植物が現れるのはSz-3以降の比較的最近のことと考えられる。

<参考・引用文献>

- 杉山真二(1987)タケ垂科植物の横断面形態学的研究、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 杉山真二・平田勉(1996)植物珪穀体分析による宮城県森遺跡とその周辺の古環境推定-中間更新世以降の水期一間水期サイクルの統計一、日本第四紀学会講演要旨集、26、p.68-69.
- 杉山真二(1999)植物珪穀体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史、第四紀研究、38(2)、p.109-123.
- 杉山真二(2000)植物珪穀体(ブラント・オパール)、考古学と植物学、同文社、p.189-213.
- 杉山真二(2001)植物と環境、季刊考古学第74号、雄山閣出版、p.14-18.
- 高橋成紀(1992)北に生きるシカたちー、ササそして苔をめぐる生態学ー、どうぶつ社。
- 藤原宏志(1976)ブラント・オパール分析法の基礎的研究(I)-数種イネ科栽培植物の珪穀体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 室井 純(1969)竹・葦の話—よみもの植物記、北陸館

表1 宮崎県、大岩上田村遺跡における植物珪穀体分析結果

分類	学名	箇所トレンチ-箇所トレンチ																												
		1	2	3	4	5	6	7	8	10	12	14	15	16	18	20	21	22	23	25	26	28	29	31	33	35	37	38	40	
イネ科	Oryza sativa (Oryza)	75	36	14	7	7																								
イヌコギ	Oryza sativa (Domestic rice)	7																												
オムギ属(仮の裏皮穀)	Pennisetum sp. (Pennisetum)	7																												
キビ属	Pennisetum sp. (Pennisetum)	7	14	24																										
ヨシ属	Pennisetum sp. (Pennisetum)																													
コシヒカリ	Pennisetum sp. (Pennisetum)																													
ススキ属	Miscanthus type	41	122	100	49	72	78	35	78	12	45	27	24	15	7	21	11	25	69	28	14	13						14		
クワクササ属	Andropogon type	34	29		7	22	38	31	43	13	15	74	21	14	14	22	30	168	43	21	7	T	T						26	
クワクササ属	Andropogon type																													
モコク属	Sorghum type																													
シラサギ	Zizaniopsis type																													
Bタイプ	Zizaniopsis type																													
タケ属	Brachypodium (Brachypodium)																													
タケ属	Phegopteris sect. Moidale	135	196	60	235	238	240	145	50	13	250	141	261	30	236	137	145	87												
タケ属	Phegopteris sect. Moidale	60	216	201	546	410	207	50	13	438	753	171	7	185	177	184	104													
タケ属	Phegopteris sect. Moidale	7	7	21	36	7																								
ミコササ属	Sasa sect. M. (M.)/M. (M.)	41	14	22	22	14	14																							
ミコササ属	M. (M.)																													
タケ属	Phragmites	14	14																											
タケ属	Others	102	151	126	180	201	120	235	64	47	245	323	391	7	242	279	352	352	48	43	26	7	7	14	22	7				
その他	Others																													
その他のイネ科	Others	20	22	7	T	21	7																							
茎の毛	Hair origin	273	258	294	345	517	450	449	121	100	453	652	453	7	301	302	306	266	214	229	142	7	35	7	22	5				
茎の毛	Hair origin																													
茎の毛	Stone origin	500	486	458	581	729	558	526	294	265	690	734	562	37	845	825	837	564	503	487	434	321	427	321	323	290				
茎の毛	Others	T	26	T																										
根状茎	Aroid	1065	1545	1975	2504	2586	2220	1097	916	446	2205	2692	1934	185	1819	1936	1980	1602	1996	2017	998	742	909	869	869	951	817			

おもな分類別の遺存量(単位: kg/dm³)

イネ科	Oryza sativa (Oryza)	2.31	1.56	6.42	6.21	5.21																							
ススキ属	Pennisetum type	0.51	1.51	1.24	6.61	8.80	0.95	0.44	0.97	0.17	0.56	0.46	0.42	0.18	9.00	0.26	0.14	0.42	0.35	0.26	0.18	0.17							
タケ属	Phegopteris sect. Moidale	1.30	1.17	0.98	2.65	2.75	1.85	0.58	0.15	3.14	1.62	3.02	0.35	2.30	1.59	1.65	1.13												
タケ属	Phegopteris sect. Moidale																												
タケ属	Sasa sect. M. (M.)/M. (M.)	0.31	0.85	0.96	0.19	0.27	0.26	0.05																					
タケ属	Sasa sect. M. (M.)/M. (M.)	0.12	0.04	0.04	0.07	0.04	0.04																						

タケ類の総量(%)

イネ科	Phegopteris sect. Moidale	59	51	35	49	44	55	55	71	71	59	29	71	66	64	55	55	55										
タケ属	Phegopteris sect. Moidale	50	55	45	55	51	49	28	29	41	58	25	9	24	30	27	25											
タケ属	Lomagramma	8	2	3	3	4	5	2																				
タケ属	Lomagramma	3	2	4	1	1	1																					
ミコササ属	Sasa sect. M. (M.)/M. (M.)	0.12	0.04	0.04	0.07	0.04	0.04																					

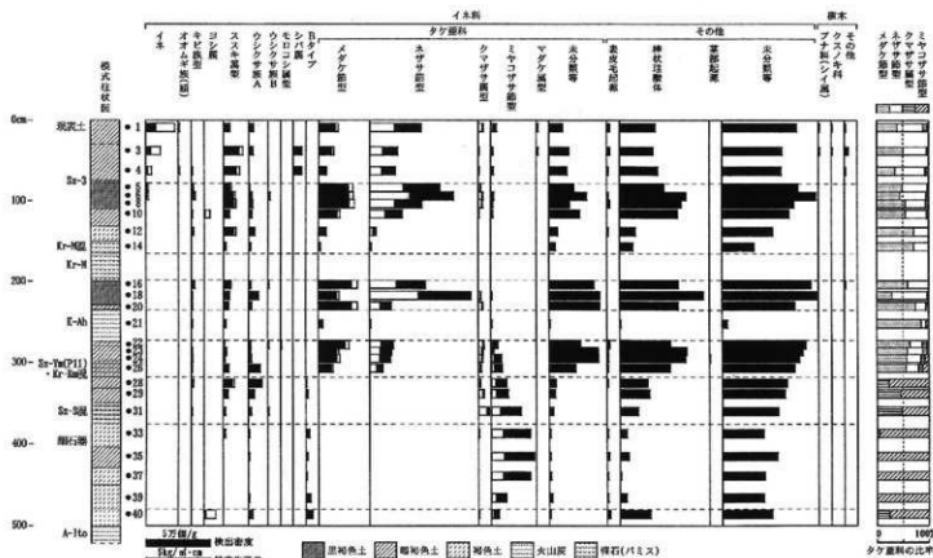
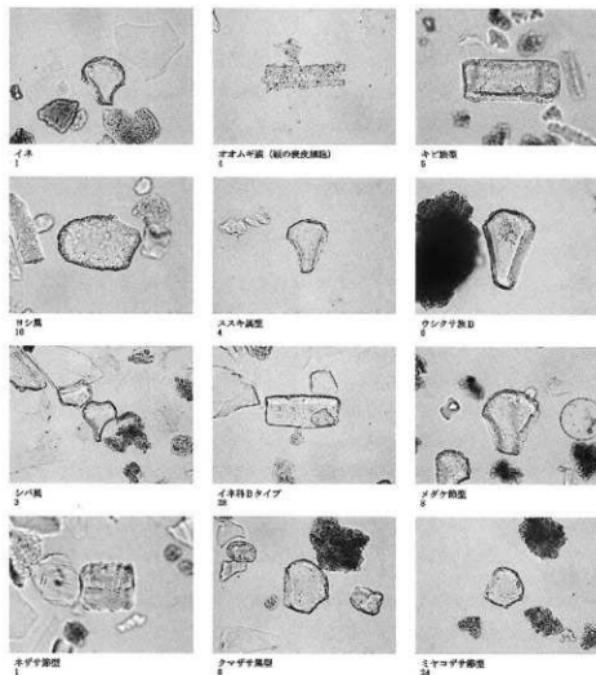


図1 大岩田上村遺跡における植物珪酸体分析結果



植物珪酸体の顕微鏡写真

— 50 μm —

第3節 大岩田上村遺跡出土のウマの遺体

西中川 駿・久林朋憲
(鹿児島大学獣医学科解剖学教室)

1. はじめに

わが国のウマの起源、系統については、今まで林田や野澤らにより体型や血液学的な観点から調査がおこなわれ、林田は小型馬の起源を中国の四川、雲南に求め、南から黒潮に乗って北上して来たといい、野澤は、わが国のウマはすべて中型の蒙古ウマに起源し、朝鮮半島経由で渡来したことを論じている。筆者らはこれまでわが国の遺跡から出土したウマの遺体を調査し、少なくとも623カ所から検出されていることを報告した。地域別では関東が247カ所最も多く、次いで九州(105)、近畿(95)である。

宮崎県下のウマの出土例は、古墳時代の久見追1号土壙や中世の祇園原地区遺跡など7カ所から報告されている。

今回、調査を依頼された大岩田上村遺跡は、宮崎市大岩田町6809番地に所在し、農用地総合整備事業区画整理に伴い、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成11・12年に調査を実施し、旧石器～近世の造構が検出された遺跡である。動物遺体は、埋葬上坑(近世)から検出され資料は発掘調査後当研究室へ持ち込まれたもので、子ウマの遺体であり、ここではその概要を報告する。

2. 遺体の出土状況

埋葬土坑は、発掘時の図面をみると子ウマ1頭が入る長楕円形で、遺体は頭部を北にして頸を曲げて頭骨切歯部を後方へ向け、前、後肢を伸ばした状態で埋葬されている。当教室へ持ち込まれた資料は、左上顎乳臼歯、左右下顎骨と乳臼歯、上腕骨、胸椎、腰椎、寛骨、大腿骨などであるが、形を留めているものは上顎乳臼歯(DP³～DP⁴)と左右乳臼歯(DP₃～DP₄)のある下顎体のみで、完形骨はない(図版1の1～6参照)。出土総重量は552.0gである。

3. 出土骨の概要

計測可能な資料は、上顎乳臼歯(DP³～DP⁴)と左右乳臼歯(DP₃～DP₄)を有する下顎体のみで、他は骨の種類を同定することができる程度の保存状態である。左上顎DP³の歯冠長、幅、中心高は28.89・17.19・23.46mmであり、DP³・DP⁴のそれらは31.58・19.26・30.25mm、29.57・18.25・25.45mmである。また、左下顎のDP₃の歯冠長と歯冠幅は31.02・8.99mmであり、DP₃・DP₄のそれらは28.80・9.68mm、E32.01・11.02mmである。乳臼歯の計測値からの体高の推定式は作成されていないので、左下顎DP₄の後縁、M₁の前縁における下顎体の高さ54.34mmから、筆者らの方法で下顎全長を求め、林田らの方法で体高を推定すると98.29cmである。年齢は永久歯の下顎第一後臼歯が萌出前であることから、1歳未満であると推測される。

4. 考察

九州の遺跡からのウマの出土例は、105カ所を数え、県別では福岡の41カ所が最も多く、次いで熊本県の28カ所である。時代別では中世の43カ所が最も多く、次いで古墳時代の29カ所である。縄文時代のウ

マの出土例として、長谷部は石器時代にウマありと論じ、また、林田(1956)は、鹿児島県出水貝塚からウマの遺体を検出し、小型馬の存在を報告している。しかし、出水貝塚のウマは、近藤ら(1992)のフッ素による年代測定で、13世紀に下がることを報告している。ウマの渡来時期については、長崎県福江市の大浜遺跡出土の臼歯がC¹⁴でA.D 40土90年と測定され、これが最も古く、現在のところ弥生中期に蒙古系のウマが朝鮮半島経由で北部九州周辺に渡來したと考えられている。

宮崎県下のウマの出土例は、古墳時代の六野原1号墳、久見追1号土塙など7カ所から報告されており、最近では祇園原地区遺跡や林遺跡から出土例が報告されている。祇園原地区遺跡のウマは、臼歯のみの出土であるが、体高が129~132cmと推定され、典型的な中型馬であり、林遺跡のウマは推定体高122~126cmと少し小さいが、中型馬の範疇にある。本遺跡のウマは、1歳未満で体高98cmの子ウマで、上坑内に埋葬されており、これまでの子ウマが埋葬されている例は九州では極めて珍しい。ウマは一般的に農耕や運搬、騎馬などに使役されているが、本遺跡のウマはおそらく病死か不慮の事故により死亡し、埋葬されたものと考える。

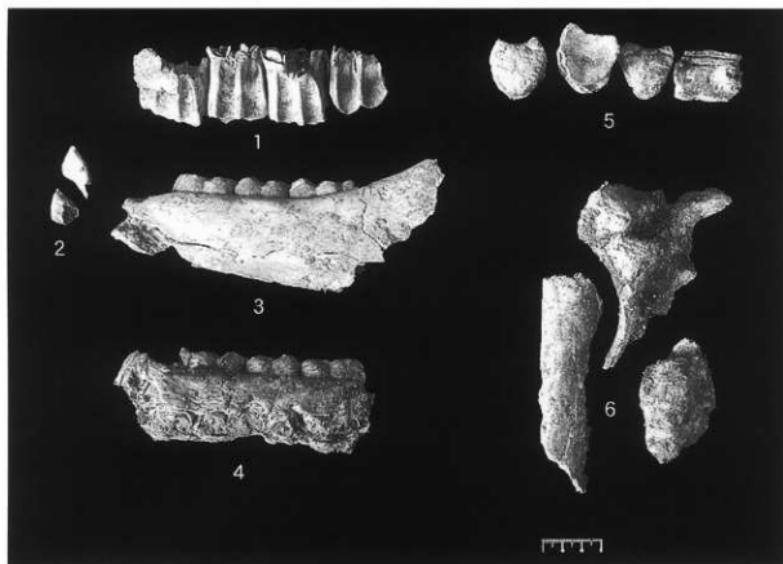
5.まとめ

大岩田上村(近世)出土の動物遺体について調査した。

1. 大岩田上村遺跡からは、ウマの埋葬遺体が出土し、発掘時にはほぼ全身の骨格が存在していたが、取り上げができたものは、上顎臼歯、下顎臼歯、胸椎、腰椎、上腕骨、大腿骨などで、完全な形のものではなく部分骨であり、総重量は552.0gである。
2. 上、下顎の臼歯は乳臼歯で、それらの計測値は前述した。左側の下顎体の高さから体高を推測すると、98.29cmであり、年齢は1歳未満の子馬であることが推測される。
3. ウマは一般に農耕、運搬や騎馬に使役されているが、本遺跡のウマは子馬であり、おそらく病死か不慮の事故により死亡し、埋葬されたと考えられる。

<参考文献>

- 1.長谷部昌人 石器時代に馬に関する研究、人類誌40(4), 131~135(1925)
- 2.林田重幸 本馬の系統に関する研究 p.p. 1~180, 日本中央競馬会、東京(1978)
- 3.金子浩昌ら 中世遺跡における動物遺体—舞鶴市内遺跡の調査例を中心として— 舞木義昌先生古稀記念論集、考古学と関連科学、p.p. 407~435(1988)
- 4.近藤 恵佑 出水貝塚出土ウマ遺存体の年代学的研究、日本文化財学会研究発表旨録、pp.70~71(1991)
- 5.宮崎県教育委員会 新富町祇園原地区遺跡出土の馬歯、祇園原地区遺跡、p.p. 91~95(1996)
- 6.宮崎市教育委員会 松添貝塚、宮崎市発掘調査報告書、2, p.p. 1~21(1974)
- 7.西中川 駿ら 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、p.p. 1~195(1991)
- 8.野澤 康 東亞と日本在来馬の起源と系統、日本ウマ科学雑誌、3, 1, p.p. 1~18(1992)
- 9.芝田清吾 日本古代家畜史の研究、p.p. 100~293(1969)



図版1 (1~6)

第IV章まとめ

今回の調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。中でも、都城市では初めて検出された旧石器時代の細石刃石器群や、中世の道路状遺構は注目されるものである。

以下、調査で確認された遺構と遺物について簡単にまとめてみたい。

1. 遺物について

縄文時代の土器

縄文土器は主に第Ⅳ～Ⅵ層から出土している。大半は破片資料で全形を知りえるものは少ない。C区で出土した本遺跡で最も大きい遺物である35は中岳Ⅱ式土器群に該当するものである。柴畠光博氏(1989)の形式分類ではⅡ-2型式に相当し、三万田式と御領式土器に並行する縄文時代後期後葉から晩期前葉の間に位置付けられる。隣接する大岩田村ノ前遺跡でも出土しており、在地形態と考えられる。A区では縄文時代晩期に比定される黒川式土器が多数出土している。C区に設定した5号トレンチにおいてP11火山灰層の下層(第Ⅺb層)中に土器片1点を確認した。層位的に判断して縄文時代早期前半の位置付けを考えている。

弥生時代の土器

弥生土器は主に第Ⅳ～Ⅴ層およびB区・1号土坑から出土している。何れも器種は甌である。弥生時代中期の所産と思われる。43・45は逆「L」字形の口縁部形態から、中期中葉の段階に位置し、石川悦雄氏のⅢ期にあたる。46～55は2～4条の断面三角形の突帯が巡らされている。突帯には爪で斜め方向の細かい刻み目が施されているが、貼付によるものか、つまみだしによるものかは不明である。

2. 遺構について

竪穴住居跡

竪穴住居跡はA区で2軒、C区で1軒の計3軒が確認されている。何れも床面積が約5.2~6.4m²と小さく、通常の住居とは考えにくいが、その性格等については特定できていない。所属時期については、遺物等から推測して縄文時代後期後葉から晩期前葉の間と考えている。

掘立柱建物跡

C区 - 1号掘立柱建物跡は、構造は桁行1間(2.06m)、梁行1間(1.60m)の東西棟である。調査区外に延びるため全貌は明らかでない。構築時期及び性格については不明である。

道路状遺構

A区 - 1号道路状遺構は、全長約37.5m、幅員約0.7~4.3m、深さは完掘状態で最深部で1.6mを測る。その断面は大きくV字状を呈し、溝の基底部(硬化面B)と西側の法面中段(硬化面A)に硬化面を有する。土層断面より、最初に硬化面Aを伴う浅い台形状の溝が掘り込まれており、それを切るようなかたちで硬化面Bを伴うV字状の溝が掘り込まれている。最深部の路面(硬化面B)の使用時期については、文明絆石の自然堆積が硬化面直上で観察されていることから、15世紀中葉までと考える。

硬化面Bには約24mの間に37基のピットが掘り込まれている。多くのピットは楕円形を呈し、路面の主軸方向に直行するように長径を持つピットが人半で、ほとんどは道路状遺構の立ち上がりを切り込むようなかたちで掘削されていた。近年、このような道路状遺構(ピット列を作う)の事例が数多く報告されているが、用途目的については、①枕木やコロ脱②路床基礎工事説③自然発生説(ポットホール説)④排水施設説⑤足掛け説などが提示されており、また牛馬歩行痕という説もある。

当遺跡の場合は、硬化面を形成する土がいずれも等質な土であり、また各々のピットの覆土も同様に等質であることを踏まえると、②の可能性が高いと考える。また、当遺跡の道路状遺構が5°の勾配で登っていることを考慮すると、⑤足掛け説も否定できない。

溝状遺構

A区(A区-I:25条 A区-II:12条)で37条、C区で1条の計38条が確認されているが、中には自然流路が含まれている可能性もある。中世から近世にわたるものと考えている。

土壙墓

A区南側の南西から北東に緩やかに傾斜する斜面上で2基が隣接して確認されている。A区 - 1号土壙墓からは土師器の环が1枚、鏽で錆着した銭貨7枚が出土している。南部九州で多く認められる事例同様、7枚組の六道銭を副葬したものと想定される。銭貨は明錢の「洪武通寶」(5枚)・宋錢の「景祐通寶」(1枚)・「祥符元寶」(1枚)である。その規格等から判断して、何れも渡来銭の可能性が高い。

A区 - 2号土壙墓からは30枚の銭貨が出土している。そのうち3枚は「崇寧通寶」(1枚)・「元祐通寶」(2枚)の大型銭で、鏽で錆着した状態で確認されている。一つの土壙墓に大型銭3枚を同時に副葬している事例は珍しい。都城市内で土壙墓から大量の銭貨が出土した遺跡としては、油田遺跡がある。そこでは7基の中世土壙墓から82枚の銭貨が出土しているが、8割が「洪武通寶」であり、大型銭は出土していない。また、2号土壙墓では、大型銭3枚の他に3地点で計27枚の銭貨も確認されている。27枚の銭貨については、鏽が著しく剥離できないため銭貨名がわからないものもあるが、「洪武通寶」が

約4割近くを占めている他、無文銭7枚などがある。「洪武通寶」の中にはその書体から筑前洪武(筑前国で鋳造されたとされる)に類似した銭貨も4枚含まれる。27枚の銭貨については何れも国内で鋳造された模鋳銭の可能性が高い。

道路敷設部分の調査

これまでの旧石器時代の人類生活の痕跡の乏しかった都城市域において、当該時代の遺物包含層の存在を確認できたことは大きな成果であろう。3号トレンチでは細石刃石器群の存在がその出土層位を含めて明らかとなった。調査面積は狭いものの、いわゆる野岳・休場型の細石刃核のみが検出されている。くわえて碎片・剥片を組成する事実からは、この場における細石刃剥離作業の行使が想定される。また、細石刃剥離以前の石核調整を示唆する稜付きの細石刃も2点検出された。今後の技術論的研究に寄与するところがあろう。製品の存在は確認していないが、2号トレンチおよび3号トレンチの一部の石器群は、その出土層位・使用石材などから、ナイフ型石器を組成する石器群の存在を窺わせる。火山灰分析の結果なども踏まえ、その性格と帰属年代については、慎重な検討を要しよう。また、今回は肉眼的分類のみにとどめたが、黒曜石の産地分析なども、必要である。

これら大要二時期にわたる石器群について、遺跡内分布などの検討あるいは器種組成の全容把握という作業は今回の調査条件では望み得なかった。とはいえ、従来、分布上の空白地帯であったこの地にひとつ点がうたれたことの意義は大きい。大岩田上村遺跡の旧石器時代遺物についてその編年論・分布論的な位置づけを追求し、隣接地域の研究動向を視野に入れつつこれを地域史のなかに組み込んでゆくことが今後に残された課題といえよう。

参考文献

- 原山一郎 「九州鉄銭に関する一考察」「九州貨幣史」第4号 九州貨幣史学会 1977
石川悦雄 「宮崎平野における土壙編年試案一環播(M.R.I.)」「宮崎考古」第9号 宮崎考古学会 1984
都城市教育委員会 「大岩田村ノ遺跡発掘調査報告書」都城市文化財調査報告書第14集 1991
都城市教育委員会 「油田遺跡発掘調査報告書」都城市文化財調査報告書第25集 1993
宮崎県埋蔵文化財センター 「市街遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第10集 1998
東郷光博 「東南部九州におけるある漢文・唐の形式組列—中岳II式土器の再検討—」「鹿児島考古」第23号 鹿児島考古学会 1989
雄山閣 「日本十箇事典」1998
宮崎県埋蔵文化財センター 「牧の原第2遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第19集 1999
宮崎県埋蔵文化財センター 「横市地区遺跡群」都城市文化財調査報告書 第50集 2000
宮崎県埋蔵文化財センター 「右寄」近遺跡「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集 2000
宮崎県埋蔵文化財センター 「王子原遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第19集 2001
高橋照彦 「日本における錢貨生産と原料製造」国立歴史民俗博物館研究報告 第86集 国立歴史民俗博物館 2001年3月
東 和幸 「考古資料と其資料の総合的研究」財團法人鹿児島青会財団 半成13年研究助成報告書 2002
常辺秀人 「南九州縄文晚期土器の再検討」-入佐式と黒川式の綱目-「鹿児島考古」第31号 鹿児島考古学会

第3表 出土遺物觀察表(1)

遺物番号	種別	器種 部位	出土 地点	法 量			手法・調整・文様ほか			色 調			胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	縄文土器	浅鉢 口縁	A-I N-V層				横ナデ スス付着	丁寧な横ナデ	黒褐	褐 黒褐	1mm以下の灰黄褐・褐灰色粒、黒光沢粒			
2	縄文時代	浅鉢 口縁	A-II VI層	推 13.8			ナデ スス付着	ナデ	灰黄褐 黒	灰黄褐 褐	2.5mm以下の灰白色粒 1mm以下の透明粒			
3	縄文土器	浅鉢 口縁	A-I V層				ミガキ 沈線	ミガキ 炭化物付着	黒褐	褐 灰黄褐	3mm以下の淡黄・灰白・褐灰・黒褐色粒			
4	縄文土器	浅鉢 口縁	A-I N-V層				ミガキ 沈線	ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	微細な黒褐色粒 微細な無色透明光沢粒			
5	縄文土器	深鉢 口縁	A-I N-V層				ナデ 沈線 貝紋文 スス付着	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	3mm以下の光沢粒 1mm以下の浅黄・黒褐色粒			
6	縄文土器	深鉢 口縁	A-I N-V層				ナデ 沈線(2条) スス付着	ナデ	黒褐	黒褐	1mm以下の無色透明光沢粒・ 黄褐色粒 2mm以下の灰・黒褐色粒			
7	縄文土器	深鉢 口縁	A-I N-V層				スス付着 風化ぎみ	風化ぎみ	明黄褐	黄橙	3~5mmの光沢粒 1mm以下の淡黄・灰白・黒褐・ 褐灰色粒			
8	縄文時代	深鉢 口縁	A-II V層				斜方向の条痕後 横ナデ	横方向の条痕	にぶい橙 褐灰	灰黄褐	微細~2mmの透明・半光沢粒、 浅黄橙・褐灰・灰白色粒			
9	縄文土器	深鉢 口縁	A-II VI層				ナデ 一部スス付着	ナデ	にぶい黄褐 黄灰	浅黄 暗灰黄	微細~3mmの灰白・褐・褐灰 色粒			
10	縄文土器	深鉢 口縁	A-I N-V層	推 20.8			風化が著しい	風化が著しい	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の褐色粒 1.5mm以下の灰白色粒 1mm以下の黑色粒			
11	縄文土器	浅鉢 口縁~胴部	A-I V層	推 25.8			横ミガキ 凹線 スス付着	風化ぎみ	にぶい褐	灰黄褐	3mm以下の暗褐色粒 2.5mm以下の灰白・褐色粒 1.5mm以下の透明光沢粒			
12	縄文土器	浅鉢 口縁~胴部	A-I N-V層				ナデ スス付着	ナデ	黒褐 にぶい黄褐	灰黄褐	2.5mm以下の透明光沢粒、 褐色粒 微細な透明光沢粒			
13	縄文土器	浅鉢 口縁~胴部	A-I N-V層				横方向の条痕後 ナデ スス付着	横方向の条痕後ナ デ	にぶい橙	にぶい橙	5mm以下の赤褐色粒 4mm以下の黒褐色粒 3mm以下の乳白色粒			
14	縄文土器	浅鉢 口縁~胴部	A-I N-V層				横ミガキ 沈線	丁寧なナデ	にぶい橙	灰黄褐	微細な黒褐色粒 微細な無色透明光沢粒			
15	縄文土器	浅鉢 口縁~胴部	A-I N-V層				ナデ 刻目突起 スス付着	ナデ	橙 黒褐	明黄褐 黑褐	3mm以下の光沢・灰白・褐灰・ 黄褐色粒			
16	縄文土器	浅鉢 口縁~胴部	A-I N-V層	推 26.8			ミガキ 一部風化	ミガキ 一部風化	黄灰	黄灰	微細な無色透明光沢粒 2mm以下の黄褐色粒 微細な黒色粒			
17	縄文土器	深鉢 口縁~胴部	A-I V層				ミガキ 沈線 スス付着	ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の浅黄橙・灰白・褐 色粒			
18	縄文土器	浅鉢 彌溝	A-I N-V層				縫ネクタイ状突起 スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	3mm以下の黒褐色粒 2mm以下の灰・白褐色粒、黒光沢・ 半透明光沢粒			
19	縄文土器	深鉢 頭部	A-I V層				沈線(5条) スス付着	ナデ	明赤褐	橙	6mm以下の灰色粒 2mm以下の乳白色粒 微細な透明光沢粒			
20	縄文土器	浅鉢 頭部	A-I N-V層				縫ネクタイ状突起 ミガキ	ミガキ	明黄褐	にぶい黄橙	1.5mm以下の暗灰色粒 5mm以下の赤褐色粒			
21	縄文土器	浅鉢 頭部	A-II V層				横方向のミガキ	横方向のミガキ	浅黄粒	灰黄	微細な灰白・黒色粒			

第4表 出土遺物観察表(2)

遺物 番号	種別	器種・ 部位	出土 地點	法量		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
2 2	縄文土器	深鉢 胴部	A—I IV— V層			風化ぎみ スス付着	風化ぎみ	黒褐	黒褐	1mm以下の無色透明光沢粒 黒色光沢粒・黒色粒 2mm以下の黄褐色粒	
2 3	縄文土器	深鉢 胴部	A—I IV— V層			風化ぎみ スス付着	風化ぎみ	褐 にぶい黄褐 浅黄褐	にぶい黄褐 褐灰	微細~6mmの白灰・淡黄灰・ 褐灰・黒褐・明赤色・褐色光沢粒	
2 4	縄文土器	深鉢 胴部	A—I IV— V層	10.8		ナデ 指痕痕	ナデ	褐	にぶい黄褐	8mmの赤褐色粒 4mm以下の 赤褐・灰色粒 2mm以下の灰 白・黑色粒・半透明粒	
2 5	縄文時代	浅鉢 底部	A—II V層	5.5		横ナデ後、縦・ 斜方向のミガキ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	微細~4mmの透明光沢粒・灰 白・浅黄褐・褐灰色粒	
2 6	縄文土器	深鉢 底部	A—I IV— V層	11.5		横ナデ 炭化物付着	ナデ 炭化物付着	にぶい黄褐	にぶい黄褐	4mm以下の灰色粒 2mm以下の灰白色・半透明光 沢粒	
2 7	縄文時代	深鉢 底部	A—I IV— V層	11.0		ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	2mm以下の墨色光沢粒・灰 色粒 微細~1mm以下の灰 色粒 3mm以下の赤褐色	
2 8	縄文時代	深鉢 底部	A—I V層			縦方向の丁寧な ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	5mm以下の褐灰色粒 2mm 以下の灰色粒・無色透明光 沢粒 1mm以下の墨色光	
2 9	縄文時代	浅鉢 胴部	B VI層			横方向のナデ	横・斜方向のナデ	にぶい黄褐	灰褐	3mm以下の灰白・浅黄褐・黑 褐色粒・光沢粒	
3 0	縄文土器	浅鉢 口縁	C V層			横方向のナデ スス付着	丁寧な横方向のナ デ	灰褐	にぶい赤褐 暗灰	3mm以下の浅黄色粒 2mm以下の透明光沢粒 1.5mm以下の黒色光沢粒	
3 1	縄文土器	浅鉢 口縁	C V層	推 30.2		ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	2mm以下の灰白色粒 1.5mm以下の黒色光沢粒	
3 2	縄文土器	浅鉢 口縁	C V層			ミガキ	ミガキ	灰褐	にぶい赤褐	1.5mm以下の灰白色粒 2mm 以下の半透明粒 1mm以下 の透明光沢・黒色光沢光沢粒	
3 3	縄文土器	浅鉢 口縁	C V層			斜め方向のミガキ スス付着	ミガキ 炭化物付着	褐 黑褐	褐	1mm以下の褐・灰白色粒 2mm以下の透明粒	
3 4	縄文土器	深鉢 口縁	C V層			ナデ スス付着	ナデ	灰褐	にぶい赤褐 灰黃褐	微細~1.5mmの無色透明光 沢粒 微細黑色光沢粒 2mm 以下の灰白・赤褐色粒	
3 5	縄文時代	深鉢 胴部	C V層			ナデ スス付着	ナデ	褐 黑褐	灰黃褐 明赤褐	3mm以下の灰白・明黄褐・黑 褐色光沢粒	
3 6	縄文時代	深鉢 口縁 ～底部	C V層	推 32.0		回線文 回点文 ミガキ	ミガキ 風化ぎみ	赤褐 褐	褐 灰黃褐	微細~3mmの透明粒・黑色粒・ 褐灰色光沢粒・浅黄褐・灰 白・赤褐色粒	
3 7	縄文時代	深鉢 口縁 ～胴部	C V層	推 26.0		風化著しい スス付着	風化著しい	褐 黑褐	灰黃褐 明赤褐	3mmの暗赤褐色粒 3mm以下の褐灰・浅黄褐・黃 褐色粒 微細な光沢粒	
3 8	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	C V層			回線(2条) 横円形押圧 ナデ	ナデ	にぶい赤褐 にぶい黄褐	灰黃褐	微細~1mmの無色透明光沢 粒 1mm以下の黒色光沢粒 2mm以下の灰褐色粒	
3 9	縄文時代	浅鉢 底部	C V層	推 7.8		風化 スス付着	風化 スス付着 炭化物	にぶい橙 黒褐	灰褐 黑	3mm以下の光沢粒・灰白・褐 褐色粒	
4 0	縄文土器	深鉢 底部	C V層	推 7.4		ミガキ	ナデ 炭化物付着	にぶい赤褐	黄灰 にぶい褐	2mm以下の金色光沢粒 1mm以下の灰白色光沢粒 2mm以下の無色透明粒	
4 1	縄文時代	深鉢 底部	C V層	7.25		ミガキ	ナデ 炭化物付着	にぶい褐 にぶい橙	褐灰	微細~3mmの透明・黑色光沢 粒・灰白・淡黄褐褐色粒	
4 2	弥生土器	浅鉢 胴部	A—I IV— V層			貼付突唇 風化ぎみ	風化著しい	褐	褐	5mm以下の赤褐 1mm以下の 黒光沢・白光沢粒・黒褐色粒	

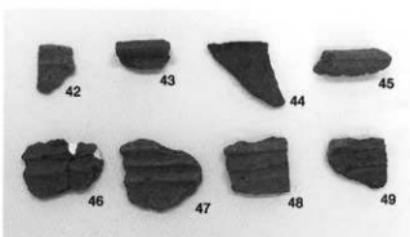
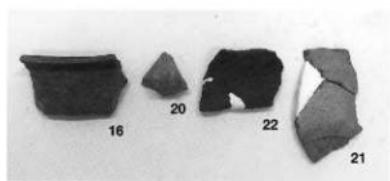
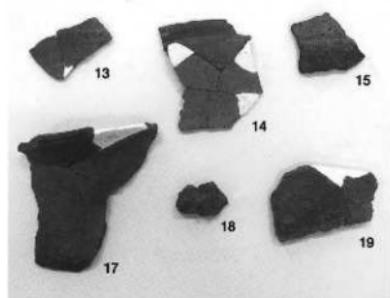
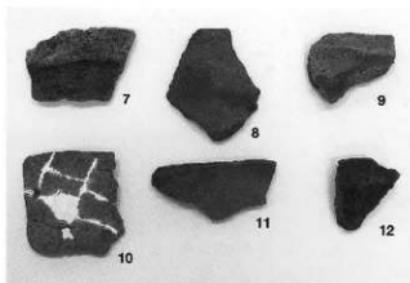
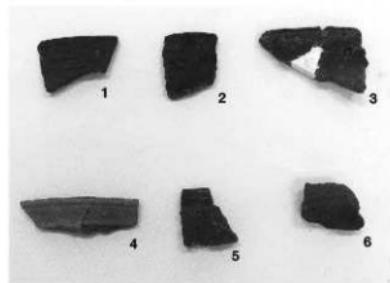
第5表 出土遺物觀察表(3)

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	法 量			手法・調整・文様ほか		色・調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
4 3	弥生土器	甕 口縁	A - I N - V層	19.6			貼付突帯 押錐 ミガキ	ナデ	橙	橙	3mm以下の純金色光沢粒 2mm以下の半透明粒 1mm以下の灰白色粒	
4 4	弥生土器	甕 口縁	A - I N - V層				ナデ スス付着	ナデ	暗褐	黒褐	3mm以下の灰白・褐灰・黒褐色粒、光沢粒	
4 5	弥生土器	甕 口縁	A - I N - V層				押錐 ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙	にぶい橙 浅黄	2.5mm以下の灰白色粒、透明光沢粒	
4 6	弥生土器	甕 胴部	A - I N - V層				貼付突帯(2条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	にぶい赤褐	にぶい褐	3mm以下の浅黃橙・虫褐色粒、 透明光沢粒 5mm以下赤褐色粒	
4 7	弥生土器	甕 胴部	A - I N - V層				貼付突帯(3条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙	にぶい褐	4mm以下の灰褐色純光沢粒 暗灰・黄褐色粒 1mm以下の灰白色粒	
4 8	弥生土器	甕 胴部	A - I N - V層				貼付突帯(2条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙	橙	3.5mm以下の赤褐色光沢粒 2mm以下の純金色光沢粒	
4 9	弥生土器	鉢 胴部	A - I N - V層				貼付突帯(2条) ナデ 風化ぎみ	ナデ 風化ぎみ	橙 黒褐	橙	2.5mm以下の赤褐色光沢粒 1.5mm以下の純金色光沢粒 1mm以下の灰白色粒	
5 0	弥生土器	甕 頭部	A - I N - V層				貼付突帯?(4条) つまみだし? ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	3mm以下の赤褐色光沢粒 2mm以下の灰白色光沢粒 1.5mm以下の灰白色光沢粒	
5 1	弥生土器	甕 頭部	A - I N - V層				貼付突帯?(4条) つまみだし? ナデ	ナデ	褐	明褐	2mm以下の茶色粒、黑色光沢・ 透明光沢粒	
5 2	弥生土器	甕 頭部	A - I N - V層				貼付突帯?(4条) つまみだし? ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の灰白・褐色粒、黑 光沢粒、透明光沢粒	
5 3	弥生土器	甕 頭部	A - I N - V層				貼付突帯?(2条) つまみだし? ナデ	ナデ	灰褐	橙	1mm以下の赤褐色粒、黑色光沢・ 半透明粒 2mm以下の灰白色粒	
5 4	弥生土器	甕 頭部	A - I N - V層				貼付突帯?(2条) つまみだし? ナデ	ナデ	橙	にぶい褐	1mm以下の透明粒、白色粒	
5 5	弥生土器	甕 胴部	A - I N - V層				貼付突帯(3条) ヘラ痕跡 横方向のナデ	ナデ	橙 明赤褐	明赤褐	1.5mm以下の浅黄色粒 2mm以下の半透明粒 1mm以下の透明粒、暗灰色光沢粒	
5 6	弥生土器	甕 胴部	A - I N - V層				刻目 横方向のミガキ スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒褐色粒 微細な透明光沢粒	
5 7	弥生土器	甕 胴部	B S C 1				貼付突帯 横方向のナデ スス付着	斜め方向のナデ	明褐	明褐	2.5mm以下の灰白・褐色、透 明粒 2mm以下の透明光沢粒、 金色光沢粒	
5 8	弥生土器	甕 底部	B S C 1	6.5			刷毛目	ナデ 炭化物付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐色粒 1mm以下の半透明光沢粒	
5 9	弥生土器	甕 口縁	B V層				貼付突唇 指揮され跡 ナデ	ナデ	にぶい赤褐 黒褐	にぶい赤褐 黒褐	1mm以下の光沢細緻粒、灰白・ 灰褐色・暗赤褐・褐色光沢粒	
6 0	弥生土器	甕 胴部	B V層	45.2			ミガキ 貼付突帯 スス付着	ミガキ	明褐	にぶい褐	3.5mm以下の半透明灰白色粒 4mm以下の赤褐色粒 1.5mm以下の灰白色粒 2mm以下の金色光沢粒	
6 1	中世	土師皿	A S D 1	10.5	7.0	2.85	回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒	

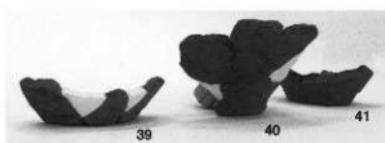
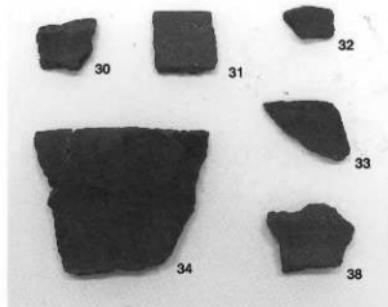
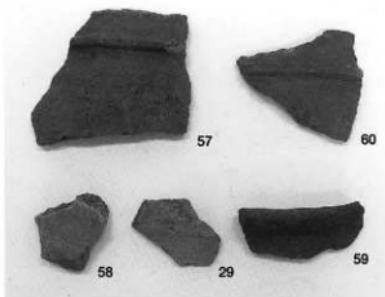
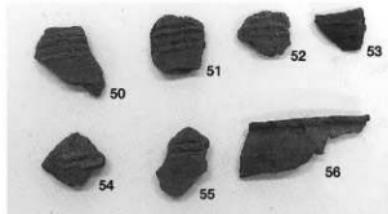
第6表 出土遺物観察表(参考資料)

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		埴土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
6.2	縄文土器	深鉢 口縁	A-I トレンチ	19.6			ナデ スス付着	ナデ	にぶい黄橙 明褐	にぶい黄橙	5mm以下の赤褐色粒 1mm以下の黒光沢・白光沢粒、黒褐色粒	
6.3	縄文土器	深鉢 口縁	A-I トレンチ				ナデ 沈継 スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	2mm以下の赤褐色粒 1mm以下の灰白色粒、1.5mm以下の灰色・透明光沢粒	
6.4	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	A-II トレンチ				ナデ スス付着	ミガキ	褐灰 黒褐	暗褐 黒褐	3mm以下の灰褐色粒 灰白色粒・白光沢粒	
6.5	縄文土器	深鉢 口縁 ～胴部	A-I トレンチ				ミガキ	ミガキ 部分的に風化	灰黄褐	にぶい黄橙 褐灰	3mm以下の灰白・褐灰・暗褐 色粒	
6.6	弥生土器	甕 口縁	A-I トレンチ	19.6			貼付突帯 ナデ ミガキ	ナデ	黒褐 暗赤褐	暗赤褐	3~5mmの灰黃褐色粒 3mm以下の透明光沢粒、明赤褐・暗・出褐色粒	
6.7	弥生土器	甕 口縁	C トレンチ				貼付突帯 ナデ	ナデ	赤褐 褐灰	黑褐 赤褐	3mm以下の金・黄橙・褐灰色 粒・半透明粒	
6.8	弥生土器	甕 胴部	B トレンチ				貼付突帯 ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2.5mm以下の灰白・褐色粒 2mm以下の透明光沢粒	
6.9	弥生土器	甕 胴部	C トレンチ				貼付突帯 ナデ スス付着	ナデ	灰褐	褐 明褐	微細~3mm以下の灰白・白・ 灰褐・淡黄褐色、黑色光沢粒	

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		埴土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
7.0	青磁	甕 口縁 ～胴部	A-II 溝溝土				施釉 買入 鏡面丸文	施釉 買入	灰オリーブ	灰オリーブ	胎土質:灰 胎土:土精良燒成:堅緻	鹿島窯系 13C後半~14C前半
7.1	青磁	甕 底部	C トレンチ				施釉 露台 高台付輪剥ぎ	施釉 見込草花?	オリーブ灰	オリーブ灰	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	
7.2	白班	甕 口縁 ～胴部	A-II トレンチ				施釉	施釉	灰白	灰白	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	中国產(華南系) 11C後半~12C
7.3	青花	皿 口縁 ～底部	A-I 表探	9.6	5.2		施釉 高台付無釉 砂目付	施釉 蛇の目釉剥ぎ	灰白	灰白	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	漳州窯系
7.4	染付	甕 口縁 ～底部	A-C 表探	7.2			施釉	施釉	明綠灰	明綠灰	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	18C
7.5	染付	皿 口縁	A-I トレンチ				施釉	施釉	灰白	灰白	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	
7.6	色絵	皿 底部	A-I 裏塗				施釉 露台輪剥ぎ	施釉 上繪付け 草花文	灰白	灰白	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	
7.7	染付	皿 底部	C トレンチ				施釉 輪剥ぎ	施釉 染付け	灰白	灰白	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	
7.8	陶器	皿 底部	A-I 表探		3.9		施釉 亲切底 目跡	施釉	黑褐 灰白	灰黃	胎土質:灰白 胎土:土精良燒成:堅緻	(元立院窯系) 17C後半~18C
7.9	陶器	碗 底部	C 表探		4.8		施釉 露台 高台内無釉	施釉 蛇の目釉剥ぎ	黑 暗赤灰	黑 暗赤灰	胎土質:褐 胎土:土精良燒成:堅緻	(龍門司系) 18C後半~19C



A区出土土器

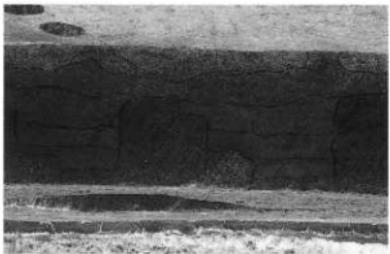




A区 中・近世遺構(溝)



A区溝(SE02) 完掘状況



A区土層断面(第5図B-B'の一部)



A区1号堅穴住居完掘状況(東から)



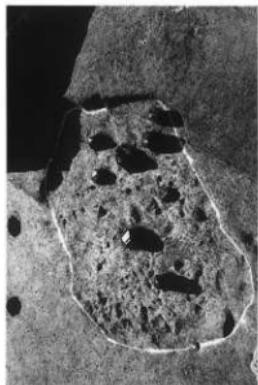
B区ピット検出状況(北から)



A区ウマ埋葬土坑



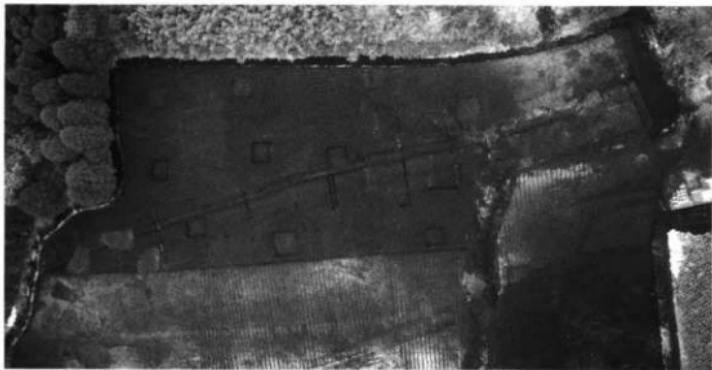
A区2号堅穴住居跡完掘状況(西から)



B区1号土坑遺物出土状況(東から)



C区3号トレンチ遺物出土状況(北から)



A区中・近世造構(溝)完掘状況(北東から)



A区1号道路状造構土層断面(南から)



A区1号道路状造構硬化面A検出状況(南から)



A区1号道路状造構ピット検出状況(北から)



A区1号道路状造構ピット検出状況(南から)

報告書妙録

ふりがな	おおいわたかみむらいせき										
書名	大岩田上村遺跡										
副書名	農用地総合整備事業「都城区域」区画整理(今町団地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書										
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書										
シリーズ番号	第77集										
執筆担当者名	南正覚雅士・堀田孝博・松本 茂・谷口武範										
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター										
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL0985-36-1171										
発行年月日	西暦2003年9月26日										
ふりがな 所収遺跡名 おおいわたかみむら 大岩田上村	ふりがな 所在地 みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 おおいわたちょう 大岩田町 6809 番地他	コード	北緯 31度 41分 50秒 付近	南緯 31度 41分 57秒 付近	調査期間 1999.11.17 2000.10.25	調査面積 22,000m ²	調査原因 農用地総合整備事業に伴う 事前調査				
		市町村 遺跡番号						45202	5031		
		種別						主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
		散布地						旧石器 縄文	竪穴住居跡 ピット群	細石刃石器群 縄文土器	・旧石器時代の細石刃石器群
	弥生	ピット群	弥生土器	・中世の溝状遺構 及び道路状遺構							
	中世～近世	溝状遺構 道路状遺構 土壙墓	土師器 中近世陶磁器 錢貨								

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第77集

大岩田上村遺跡

農用地総合整備事業「都城地区」区画整理(今町開地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年9月発行

宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地他
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(75)0660

印刷 有限会社 富士写真印刷

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂字浮橋7418-2
TEL 0985(74)2179 FAX 0985(74)3066
